
東方幻風録

霊天玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻風録

【Nコード】

N3948Y

【作者名】

霊天玖

【あらすじ】

咲夜を失った紅魔館……

人間ではない風也達……

あれから長年が過ぎ風也の居る幻想郷にはあの時の霊夢達はこの世に居なかった……

そして決断する。新たな次元へ行く事を

そして別の次元の人間界で、幻想郷に運ばれる一つの魂……
どんな外史が語られるのか

この小説は第1部の「東方幻想録」をあらかじめ読まないといけないと思いますのでまずそちらから読む事を推奨します。

第1話 人間界へ（前書き）

あれから百数年……長い時を掛け月夜に自分の力と同じ事を教えていた。そして自分と同じ過ちを繰り返さない様に……

第1話 人間界へ

風也と月夜は紅魔館の中庭で修練をこなしていた……風也の全身が変化しているのは良くある事だが今回は月夜のメイド服が黒く変色していたのだ。各部には黒い鋼の装甲が……

「月夜、もう良いだろう。魔装を解け」

「はい……」

「やっと俺と同じ力を手に入れたな………けどお前の力なら大丈夫だ。この力が暴走するのはドス黒い殺意の塊だ……お前の力は澄んでいて穏やかな力だ、暴走は無いさ」

風也と月夜は向き合い話していた……

「この力をお嬢様を護る為に使えという訳ですか？」

「ああ、その力でレミリアを護ってやれ。俺はこの幻想郷を離れようと思う。」

「っ！？父上！？どういう事ですか！？」

「実質、お前の力の方が安全性が高く性能的には俺より上だ。だから安心して任せられるんだ」

「父上……」

「もうお喋りはお終いだ………またな……」

風也の回りには魔法陣が出現する……風也の体は徐々に粒子と化す……月夜の目には一筋の涙が流れていた……

「月夜、心を強く持て。護りたい人を思え、そうすればお前の力は数倍にも跳ね上がる。その可能性を信じろ……良いな……」

「はい……父上……」

そして風也は完全な粒子となり幻想郷から姿を消した……レミリアを月夜に任せ……

すると後ろからパチュリーが現れた。

「月夜、風也は行ったのね」

「はい、パチュリー様……」

「あの人は別の時空へ飛んだ……私達魔法使いでも数千年は研究しないと出来ない行為なのよ……」

「分かっています。父上が自分から死を選ぶ事は無いので……」

そしてパチュリーと月夜は紅魔館の中へ入って行った……

……別時空の人間界……

真夜中の廃ビルに風也が現れる……黒いコートに黒いブーツ、サングラスを付け都会を歩いていた……

外見的にはバイオ ザードのタイ ントとしか見えなかったがツツ
コむのも野暮であろう。

ゴツゴツ……

「都会か………若い頃には行った事は無かったな………」

裏路地を歩いていると若い不良がぶつかってきた……

「おいごるあ！いつてえだろ！殺すぞ！」

「………」

風也は沈黙を続けていた………それに不良はキレた……

「てめえ金置いてけや！さもないと刺すぞごらあ！」

「やれるものならな………」

「余裕かましやがって！死ねやあ！」

不良はナイフを風也の腹部に刺そうとしたが容易くナイフを止めら
れていた………

「挑む相手が悪かったな！」

風也はナイフを刃を握って不良ごとゴミ捨て場に投げ飛ばしゴミに
激突させた………

「ぐほっ……」

「全く、こういうのを社会のゴミって言うんだろっなあ……」

そして不良を放置し表通りを歩いていった……

「取り敢えずこの時空の幻想郷に行くのも良いが人間界を満喫するか……」

そして風也は実に数百年ぶりに人間界で過ごす事になったのだ……

…

第1話 人間界へ（後書き）

東方幻風録第1話開始でございます。新たな主人公も次から出る予定です。これからも東方幻想録をよろしく願います。

第2話 消える命の灯火

午前10時……………

ある十字路信号で年寄りが荷物を重たそうに運び歩いていた……………

そして途中で信号が赤になりトラックが突っ込んで来て轢かれると
思った時……………

ドグシヤアア……………

ガラんガラん……………

「お婆ちゃん、大丈夫かい？」

トラックのフロントに腕を突っ込み無理矢理トラックを止めていたのは風也だった…………… トラックはひしゃげ、余所見運転をしていた運転手は野次馬と共に驚愕だ。

「ああ……………ありがとうねえ」

風也はお婆ちゃんを向こうの歩道まで連れ一息をついた。

【トラックにぶつかってトラックが壊れるなんて……………】

【というか腕……………刺さってたよね？】

周りに居る一般人はそんな話をしていたが聴覚が人間より良いからか何もかも聞こえていたが無視してその場を離れた。

「はあ……………身体能力が高過ぎるのも人間界では苦勞するなあ……………」

風也は人間並の手加減をするのに苦勞していた……………」

「だが……………そろそろ誰かが幻想郷に送られる事になるな……………死ぬか呼ばれるか……………どっちかだ……………」

風也はこの都市全てに神経を集中し探索を始めた……………」

ある学校では……………授業で柔道を行っていた……………」

「来い！恭輔！」

「へいへい……………だけど、もうこれ飽きたんだよなあ……………はっ！」

「ぬあっ！？」

その勢いで先生らしき柔道着を来た人は恭輔という青年に背負い投げを受けた。

ドゴンッ！

綺麗に背負い投げは決まり周りの生徒は拍手をしていた……………」

「全く……………恭輔は良くやるよ……………」

「そろそろ飽きて来てるんだけどね……………」

この青年は『霧生恭輔』という名前で剣道、柔道、空手に関しては全国大会で全て優勝を勝ち取っている猛者であった……

「面倒だし帰っても良いですかね？」

「仕方ないな、今日は帰っていいぞ」

「どーも」

そして着替え室で柔道着から制服に着替え鞆を持ち帰路に着いていた……

「本当に退屈だなあ……もう少し刺激のある生活がしたいわ……」

恭輔がため息をついて居ると前方から声が聞こえた……

『ひったくりよー！』

その声が聞こえた時、前を向くと黒い帽子を被った中年の男が走って来ていた……その後ろには女性が膝をついていた……

「はあ……ひったくりね……」

「どけガキ！」

「うるさい……」

恭輔は通り過ぎようとした男の服を掴み足をかけバランスを崩させた……

ドゴッ！

「がっ！！」

円運動の要領で男を一回転させ背中から一気に強打させた……………男は泡を吹き気絶していた……………

「はぁ……………」

その後、その男は警察に連行され恭輔は表彰されたがどうでも良い思っていた。

そして、工事中ビルの近くで悲劇は起きた……………

偶然なのか目の前で作業中の小型鉄骨が落ちて来た……………その下には……………銀髪三つ編みの女性が気づかず歩いていた……………

【そのこの姉さんー！逃げろー】

「鉄骨だと！？間に合えっ！」

先に恭輔が気づき考えるより先に体が動いた……………

「速く此处から逃げろ！あぶっ！」

「え？」

ゴシヤッ！

女性に声を掛け気づかせると目の前に鉄骨の1本が落ちて来る……

そして恭輔が女性を押しして鉄骨の及ばない所まで出すと……鉄骨は……
恭輔の体を簡単に貫いた……

「じぶっ……………」

口から血がこみ上げ大量に血を吐き倒れた……………その場は血の海と化した……………

その後救急車で運ばれ病院で緊急手術が開始された……………

助けられた女性は手術室前で座っていた……………そしてランプが消え、手術室から医師が出てきた……………そして女性は医師に近づくと

「……………」(フルフル)

医師の横振りの否定……………それでどういう事なのかすぐにわかった……………

「……………」

その女性は病室に行き手を握る……………冷たい手だった……………血の気のない死んだ手が……………

すると後ろでスキマが開き八雲紫が姿を表す……………

「永琳、迎えに来たわよ。用は済んだかしら？」

「紫……………私は……………医者なのに人を危険な目に合わせてしまったわ

.....」

「その子が永琳を助けたの？」

「ええ、だからこの子の魂と記憶を幻想郷の彼岸に送って欲しいの」

永琳のその言葉に紫は驚いた.....

「本気なの？」

「これじゃ報われないわ、だから生きて欲しいの」

「分かったわ、任しておきなさい」

.....某所.....

風也は気配に気づいた.....

「この感覚.....スキマ妖怪の気配だ.....遂に現れたか.....」

風也もその感覚を？み魔法陣を使い幻想郷に飛び消え去った.....

第3話 彼岸と幻想郷

そして紫によって魂と記憶は幻想郷の彼岸に送られ、恭輔は目を覚ました……………

「此処は……………？俺、鉄骨刺さって死んだんじゃ……………」

恭輔は自分の体を見ると心臓部分に穴がぽっかり空いていた……………鉄骨が刺さった部位である。

「マジで死んでるっばいな……………じゃあ此処は三途の川ってか？んな訳無いか……………」

そうして川を眺めていると後ろから声をかけられた。

「良く分かったねえ。此処は三途の川の岸さ」

恭輔が後ろを向くと胸が大きい桃色の髪色のした鎌を持つ女性が居た。小町である。

「うおっ！？まさか死神？俺にトドメでも刺しに来たのか……………」

「君はつくづく勘が良いねえ、だけど君は何処で死んだか覚えてるか？」

「俺は道路で鉄骨に刺さって死んだんだ」

すると小町は考え込んだ……………

「道路？……鉄骨？まさかアンタは人間界から来たのかい！？」

「は？どういう事？」

恭輔の頭は行き当たりばったりな事が多く混乱していた。

「だから此処は人間界で死んだ奴が来る筈の無い所なんだって」

「はあ……なるほどねえ……」

「という事は映姫様の所にも報告しなきゃ行けないから……もう仕方ない！舟に乗りな！」

「あ、分かった」

恭輔は小町の舟に乗り小町は舟を漕ぎ始め進み出した。

「そついや名前は何て言うんだい？」

「あ、名前は霧生恭輔だけど」

「恭輔か、私は小野塚小町って言うんだ。私にはタメ口で良さ」

「じゃあ……よろしく、こまつちゃん」

そう言われると小町はきよとんとしてから笑いだした。

「ぷっ、あははははは！そう呼ぶかい。まあよろしくな」

そして彼岸の裁判所となる建物に着いた……

「じゃあ恭輔は此処で待っていておくれ、映姫様と話して来るから」
そう言つて小町は建物の中へ入つて言つた……………そして10分経つと小町が戻つてきた……

「恭輔、映姫様がお呼びだから着いて来ておくれ」

「こまつちゃん、その映姫つて上司？」

「まあそうなるねえ。逆らつたら怖くてね。着いたよ」

廊下で話しをしながら歩いていると目的地に着いた。そこには幼女とはいかないが身長160cmはある少女が居た。

「小町、お疲れ様です。貴方が恭輔さんですね。貴方の経歴を人間界担当の閻魔から見せて貰いました。素晴らしい経歴で天国行きも問題無いですが事故死したらしいですね？」

「あ、そうだけど……」

映姫の問いに恭輔は的確に答えて行く。嘘を話さず真実を……

「調べた結果で幻想郷の者が関わっている事が分かりました。ですから貴方の命を生き返らせ、この幻想郷で人生を送るというのもどうですか？」

「退屈な生活に飽きてたからそれで行かせてもらつよ」

「では、手続きを済ましてから遣いの舟で幻想郷に向かつて下さい。」

その後の対応は任せられる者が居ますので」

そして生き返り手続きとやらを済ませ遣いの死神の舟で幻想郷に向かう所だった……………

「では恭輔さん、新たな人生を送って行って下さい。死んで此処に戻ってくる事はやめて下さいよ？」

「分かってます。映姫様もお元気で。こまっちゃんにもお元気でとお伝え下さい。」

「分かりました。本当はそういうのは駄目ですが今回は免除して伝えておきます。」

「ありがとうございます。では」

そして遣いの舟は漕ぎ出して幻想郷へと向かって行った……………幻想郷で待ち合わせをして居るのは誰なのだろうか……………それを胸に秘め期待していた……………

こうして幻想郷のある川に着いて舟を降りてから遣いの死神に一礼しその場で待っていた……………

「本当に此処で良いんだらうか……………結構待ってるけど……………」

すると森の方で声が聞こえた……………

「えーっと、閻魔さんから言われた場所って此処だっけ？青年が居るって聞いたけど……………って君かな？」

そこにはもう幼女としか思えない少女が来たのだ………守矢の神、土着神の洩矢諏訪子であった………

「えーっと、映姫様の指示で此処に居るんすよ………」

「ふむ、という事は君だね。外から来た外来人というのは。いやー！見つかった良かった良かった」

「えーっと、貴女は？」

「おっと、紹介を忘れてたね。守矢神社という所で神をやってる洩矢諏訪子って言うんだよ。よろしく!!」

諏訪子の周りには蛙が数匹居たがとりあえずスルーした。

「霧生恭輔です。神様に会えるのは光栄ですよ。」

恭輔と諏訪子は握手を交わす。

「そんな硬くならなくても良いよー、仲良くなる為に砕けて話そう話そう！愛称付けちゃっても良いからさ」

「うーむ……じゃあケロちゃんとか？」

そして諏訪子が固まる………

(やべええええええ!!地雷踏んだあああああ!!)

第4話 能力の開花

そして諏訪子と共に妖怪の山に着き山を登り始めた……………

そして諏訪子と話しながら山道を進んでいた。

「そついや恭輔君は何歳なんだい？」

「一応16歳ですよ。誕生日迎えて2週間しか経ってませんがね」

恭輔は16を迎えて一ヶ月も経たない内に命を落としていた……………
現実是非情だ……………

「なるほどね〜、じゃあウチの早苗と歳が近いね〜」

「早苗？誰ですか？」

「私の子供だよ、こつ見えても私は既婚だよ。」

「わお……………マジですか」

「まあ会ってみると良いよ。」

そして山道の中腹まで着いた所で休憩していた……………

「結構長いなー……………この山……………」

「まあ此処まで徒歩はキツイからねえ……………はあ……………厄介事になるかな……………」

諏訪子が何か殺気を感じていた……………茂みの中には獰猛な獣が数匹潜んでいた。

「え？どうした？」

恭輔は殺気を感じていなく疑問しか出なかった。

その瞬間、6匹の獣は一斉に襲い掛かって来たのだ。

「全く、神を襲うなんて身の程知らずだね」

諏訪子はフラフラの様な輪っかを複数投げ獣に直撃させる。だがその中の2匹は鉄の輪を避け、恭輔を襲い出した……

「しまった！ぐっ……………邪魔を……………」

怯んだ獣は再度諏訪子に牙を剥き、動きを封じていた……………獣特有のコンビネーションだったのだ。

「は？マジかよっ！」

恭輔はギリギリで獣の噛みつきを避けとりあえず茂みの中に逃げ出した。

「あんな獰猛な獣の相手なんて無理だろおおおお！」

獣は血に飢えている様で獰猛さが増していたのだ。恭輔はそれを本能的に感じ取り逃げていた。

「あーもう！逃げるのは辞めだ！クソ食らえだあああ！」

恭輔は一気に方向転換し木の枝をへし折りそれで獣の頭を振り抜いた……………

バキヤツ！

その枝は獣の頭には当たらず、獣に噛みつかれ枝がへし折れた……………

「わーお……………これ……………無理じゃね？」

恭輔は折られた枝を捨てると獣はその隙を突いて腕に噛み付いた！そしてその牙はどんどん腕に食い込んでいく……………

【ガルルルル……………】

「いだだだだっ！このっ……………クソ犬がああ！」

その瞬間、地面から土が盛り上げ獣の腹部を強打し吹き飛んだ。

【キャウンツ！】

「へ？何今の……………」

恭輔は突き出て来た土にびっくりしていた……………これが恭輔の能力なのだ……………

獣は地面に落ちすぐに起き上がった。恭輔の腕には噛み跡が残りそこから血が出ていた……………

「いつてえ……………何も出来ねえからって……………一方的にやりやがって……………ふざけんなよゴルア！」

その直後、その怒りに反映されるかの様に獣の両側から石壁が地面から突き出し一気に間を締め獣を潰した……………

ゴオンッ！グシャ……………

畳まれた石壁の間からは血が流れていた……………完全に潰れた証拠だ。

「恭輔君〜！大丈夫か〜い？」

後ろから諏訪子が来た。彼方も獣を始末したらしい……………

「ちょっと腕を噛まれちゃってね……………」

腕の怪我を諏訪子に見せてから腕を抑え簡易止血していた。

「それにしても、この石壁は恭輔がやったのかい？あそこの土も……………」

諏訪子は獣を潰した石壁、突き出た土を見て驚いていた。

「なんか出てきた（キリッ）」

「多分恭輔君も能力を持ったのかもねえ。さしあたり『土を操る程度の能力』って感じだね」

「土……………ねえ。」

「まあ神社に着いたら治療しないとね。早く行くつか」

そうして早歩きで守矢神社へ歩き。30分程度で頂上にある守矢神社に辿り着いた。

「ささつ、入って入って」

諏訪子に連れられるままに神社の敷地内に入った……

「早苗——！救急箱持って来ておくれー！」

「あ、わかりました〜！」

神社の奥から女性の声が聞こえた。あの声が早苗という人のようだ。

「諏訪子様お帰りなさい。あれ？お客様ですか？」

「うん、私が閻魔さんから受け持ったのさ。とりあえず早苗は治療してあげて、腕怪我してるから」

「あ、任せて下さい。」

そして部屋で腕の消毒や薬を塗っていた……

「いだだだだだっ！痛い痛い！」

「我慢して下さい。結構傷が深いんですから」

そして痛みを耐えながらやっと包帯が腕に巻かれ治療が終わった……

……

「当分その腕は使わない方が良いでしょうね。傷が治るまで」

「ああ、ありがとうございます。あつ、霧生恭輔って言います。よろしく早苗さん」

「よろしくお願ひします。私の事は諏訪子様から聞いたのですか？」

「まあね。ケロちゃんから大まかに教えて貰ったよ」

「そうですね、これからよろしくお願ひしますね」

「君が諏訪子が連れて来た外来人か？」

早苗と話していると背の高い女性が立っていた。八坂神奈子である。

「はい、そうですね。」

「私は八坂神奈子だ、神をやっている。ふむ、性格は良さそうな感じだな、此処で分からない事があったら遠慮無く聞くといい」

「ありがとうございます。」

そして守矢神社での生活が始まるうとしていた。

第5話 諏訪子の特訓

守矢神社に来てから数日が経ち怪我した腕もある程度動くようになった。

「やっと痛みが引いたな……だけど噛まれるのはもう勘弁だな……」

「お、居た居た。恭輔君、ちょっとこっちに来てくれるかな？」

「あ、ケロちゃんどうしたんですか？」

そして諏訪子について行くと水晶が一つ置いてある部屋に着いた。

「これに力込めてみて、反応すれば何かしら能力を持ってるし反応しなければ能力は無いって分かるからね」

諏訪子から大きな水晶を渡される。結構な重さであった。

「こ、これに力を込めろってこんな感じ？」

恭輔が水晶に力を込めると透き通った様に透明な水晶が茶色く濁り出した。

「やっぱり能力持ちだったね。じゃあこれも渡せるね」

諏訪子から次に渡された物は真っ白なカード15枚だった……

「これは？」

「スペルカードの元、さっきの水晶に力を込める感じに込めればスペルカードが出来るよ」

「なるほどー、どれどれ……………」

するとカードが9枚光り、スペルカードが出来上がった。

土符『ソイルクエイク』

砂符『サンドマニユピレート』

石符『ストーンウォール』

泥符『スワンプキャプチャ』

岩符『ロックブラスト』

鉦符『ルビーストライク』

鉦符『サファイアブレイド』

鉦符『トパーズシールド』

鉦符『エメラルドスプラッシュ』

「結構出来たねー。とりあえず力に慣れないと此処じゃ生きていけないからねー」

「後6枚が気になるけどスペルカードにならないな……………」

いくら力を入れてもカードは変化しなかった。

「多分まだ未熟な部分があるからだと思うよ。」

「なるほど……やっぱ特訓なのか……」

「とりあえず恭輔君、金を出せるかな？」

「あ、分かった。」

すると恭輔の足元から大量の金鉱が飛び出した。

「これを加工して君の体に装着しようと思ってね」

神様加工中………

ズシッ……

「重っ！」

「そりゃあ金だから比重が重いからね。それで普段生活出来れば良くなるよ」

「なるほど、そして訓練も？」

「恭輔君、勘が良いねー、その通りっ！」

諏訪子は恭輔に向けて鉄の輪を3本投げ出した。

「重くて動かない……………これかっ！？鉋符『トパーズシールド』！」
動きが鈍い恭輔はスペルを唱えると手の先に四角の黄色い鉋石が出現し鉄の輪を全て弾いた。

ガキガキンツ！

「判断も良いねえ、じゃあこれはどうかな？」

諏訪子は口を膨らまし大量の水を噴き出した。

「えーっと……………わっぷ！」

その水は恭輔に直撃し水浸しになって吹き飛んだ。

「あっぶな……………」

「余所見は駄目だよー！」

土の中から翡翠が飛んできてそれに驚いて居た。

「相殺は……………これだ！岩符『ロックブラスト』！」

そして諏訪子の翡翠と似た様に齧つい岩が土の中から飛び出し飛んで行き翡翠とぶつかりどちらも砕け散った。

「ほいつー！」

「こりゃ無理だ……………」

恭輔の足元から岩が突き出し直撃して森林に突っ込んだ……………

「やばっ！恭輔君大丈夫かい!？」

「きゅ〜……………」

恭輔は衝撃で気絶していた……………

少年気絶中……………

「あたたたた……………ていうか重っ！」

恭輔が起きるとまず気づいたのは体の重さだった。金の重しで四肢が重かった。

「諏訪子もやり過ぎだな……………」

「あははははー……………ごめんよー」

横には諏訪子と神奈子が座っていた。

「調子はどうだ？」

「体調は大丈夫です。重いのは我慢しますし」

すると諏訪子が恭輔に耳打ちしてきた。

“ 神奈子にもあだ名つけてやってよ（笑） “

「マジすか？」

「諏訪子、あだ名が何だつて？」

「神奈子、聞こえてたの？」

「バツチリ聞こえていたよ。まあ、あだ名くらい良いよ」

そして神奈子の了承を貰った為、恭輔はあだ名を考え始めた……………

「じゃあ、『神奈ちゃん』でどうだっ！」

ヒュー……………

その場が静まり返る……………

（はい、地雷2個目……………）

恭輔は心の中でそう思った。

「くくくっ、諏訪子が言っていた様に面白いな。それで呼ぶと良いよ。早苗が聞いたら笑うだろうなw」

神奈子は少し笑い、諏訪子は腹を抱えて笑って居た。

「あはははははっ！！！！」

「ケロちゃん笑い過ぎやー……………（涙）」

諏訪子の笑い方に恭輔はちよつと涙目になっていた（笑）

神2人と打ち解け、後は巫女さん、早苗と打ち解ければ仲良く過ごせそうだと思っていた恭輔であった。

第6話 目論み、門番

夜の空に1人の人影が浮いていた。

「格段に力を付けてるか……あの調子ならアレに間に合う頃合いか……まあ見守る事にするか」

そしてその人影は夜の闇に溶けて消え去った。

そして後日、諏訪子との特訓のおかげで恭輔の身体能力と判断能力は格段に上昇していった。

「行くよっ！それっ！」

諏訪子は恭輔に鉄の輪、翡翠、岩の同時攻撃をしていた。

「鉾符『エメラルドスプラッシュ』」

恭輔は手から緑色の鉾石を連続で射出し全ての攻撃を相殺し間髪無く次のスペルを唱えた。

「鉾符『サファイアブレイド』」

土の中から出土した青い鉾石で出来た剣を地面から引き抜き諏訪子に斬りかかった。

ガキーン……

諏訪子は間一髪で鉄の輪で斬撃を防ぎその衝撃で十数m後ろに後退させられた。

「前と全然動きが違うねえ……っ！？う、腕が……」

諏訪子の両腕は衝撃が原因で麻痺していて動かなかった。

ヒュッ！チャキ……

恭輔は諏訪子の首筋ギリギリに剣を添え動きを止めた。

「強くなったね、私の負けだよ」

「ふう、これが弾幕勝負か……結構疲れる」

「まあ、恭輔君ならもっと強くなれると思うよ。」

恭輔と諏訪子は神社の中に入り、その後諏訪子が風呂に入った後、恭輔も汗を流す為風呂に入った。

そして4人で昼ごはんや食べていた。

「早苗さんのご飯は美味しいですな」

「褒めても何も出ませんよう？／＼／」

早苗は顔を抑えて嬉しそうだった。

「早苗、それ程美味しいって事だよ」

「そういえば獣から逃げてる時に見ただけど、真っ赤な館あったけど彼処は一体なんなの」

すると恭輔の疑問を聞くと3人は固まった。

「恭輔君……………彼処だけは近寄ってダメだよ……………」

「彼処には吸血鬼の姉妹が居てな、妹の方は地下牢に幽閉されて居るらしい」

「幽閉？一体……………」

「力が制御出来ないからさ、姉の方でも手こずる相手らしいからな」
諏訪子と神奈子の説明を聞きながら食を進めて行った……………

「でもね、妹の方に殺された人は多数居るんだよ。恭輔君もその仲間入りはしたくないでしょ？」

「まあね……………」

そして晩御飯を食べ終わり全員が就寝したのを確認した後、恭輔は守矢神社をこっそり出た……………

「真偽を確認する為だから良いよな」

そして学生服姿の恭輔は真っ赤な館、紅魔館へ足を進めたのだった。

途中、妖怪や獣に襲われたりしたがスペルを使いこなしている恭輔

には相手にならなかった。

すると途中で妖怪に襲われている魇が居たのだ。

「あれは助けるべきだな。鉾符『エメラルドスプラッシュ』」

恭輔は掌から緑色の鉾石を多数撃ち出し妖怪達に直撃させると妖怪達は怯えて逃げ出した。

「大丈夫なのかな……………」

恭輔が心配していると魇は目を覚まし周りをキョロキョロと見渡す。そして恭輔を見つめるとお礼を言っているかのように頭を下げその場から去った。

「大丈夫そうだね……………」

そして紅魔館があると思われる方向へと再び足を進めた。

紅魔館の門に着いた。半月の光が辺りを照らす。そこには居眠りをした門番が立っていた……………紅魔館の門番、紅美鈴である。

木の影で黒いコートを着た者は悟られず気付かれず居た。

「さて、お手並み拝見といこうか」

「門番が寝て良いものなのかな……………バレない様に通るか……………」

恭輔は門に手をかけ押すと……………

ギイイイイ……………

「まずっ！」

「んあ！？侵入者！？」

美鈴は門の音で起きすぐに恭輔が視界に入った。

「此処に何用ですか！侵入者というなら排除するまでです」

“バれるのは想定外だし……………殺るしかない！”

「変な噂を聞いたんでね、通させて貰うよ」

「そうですね……………ならば私も門番……………貴方を排除させて貰います
よ」

美鈴は拳を構え、恭輔はスペルカードを構えた……………

「岩符『ロックブラスト』」

恭輔がスペルを唱え地面から齧つい岩が浮き美鈴に飛んでいった。

「はあっ！」

美鈴は巧みに蹴りや拳を岩に当て全てを砕いた。

「牽制もダメとなると……………これかな土符『ソイルクエイク』」

恭輔が地面に手を置くと美鈴の真下から土が盛り上がり美鈴のバランスを崩す。

「わっ！」

「貰った！ 鉾符『ルビーストライク』！」

両手を前に出しそこから大きな赤い鉾石が撃ちだされ美鈴に直撃する……………

だがそこ鉾石は美鈴に拳を撃ち込まれ粉々に割れたのだ……………

「まだまだ甘いですね」

「マジかよ……………」

美鈴は余裕の表情、恭輔は余裕は無かった……………

第7話 メイド長と鎌鼬

美鈴の攻撃避け続けて居たが恭輔の息が上がり始めて居た……………

「あいつの体力は底無しかよっ！」

「動きが鈍って来たんじゃないですか？」

美鈴は動きに鈍りが来ずどんどん恭輔を追い込んで行った。

そして美鈴の攻撃は恭輔を捉えた……………

「がはっ……………」

美鈴の拳は恭輔の顎を打ち上げ宙に浮く……………そして美鈴はトドメのスペルを使った……………

「さようなら……………華符『彩光蓮華掌』……………」

恭輔の胸に気を込めた拳を直撃させた……………するとその部分の気が破裂した……………そして美鈴は勝つたと確信したがその確信は崩れた……………

ニヤリ……………

恭輔は不敵な微笑みをしていた。
普通なら死んでいる筈がブレザーの前部分が吹き飛んだだけでダメージが無かったのだ。

「また後で仕立て直さないとな」

恭輔はブレザーを引き破りワイシャツの上にはヒビ割れた金色の金
属が付いていた……

ピシピシ……ガシャーン！

そして全身に付いていた重りは砕けて全て地に落ちた……特訓に
付けていた超重量の重りなのだ。

「面倒だしさっさと終わそう……」

恭輔は瞬歩的な速さで美鈴の頭を掴み地面に叩きつけた……

ゴンッ！

「ぐっ……」

「鉾符『サファイアブレイド』」

地面から大剣を抜き出し剣の峰で美鈴の腹部を強打した……

「ま、まさか……」

そして美鈴は力無く倒れた……

「やっと倒せた……さて、中に侵入しますか……」

美鈴を門に寄りかからせ破れたブレザーを羽織らせ紅魔館に侵入し
た。

そして紅魔館の廊下を歩いていると大きなロビーに辿り着く。

「美鈴がやられていると思えば貴方の仕業なんですね……………」

「メイド……………なのか……………」

ロビーの中心で立つのは1人のメイド……………十六夜咲夜である。

「歓迎されてる訳じゃないか……………」

「その通りです。お嬢様の迷惑にならない内に貴方を殺すべきだと思います」

すると恭輔の全方位にナイフが浮いていた……………それは全て恭輔に向け飛んで来たのだ。

「なっ！ナイフだと！？砂符『サンドマニユピレート』！」

恭輔は砂を操りナイフを砂で無効化した……………だが脅威は終わっていないかったのだ。

「傷魂『ソウルスカルプチュア』」

その斬撃は砂を斬り裂き始め守る砂が無くなったのだ。

「ちいつ！石符『ストーンウォール』」

砂が全て無くなる前に新たに石壁を召喚し防いだ。だがそれは長くは保たなかった……………

斬撃が止み恭輔の周りには砂と石の破片しか残っていない……

「もう避けきれないのでは？銀符『シルバーバウンド』」

間髪無しにスペルを唱え大量のナイフが恭輔を襲う……

「畜生……」

恭輔が目を瞑り諦めた時……

ガシャーン！

窓を突き破った小さな生物はスペルを唱えた。

「旋符『旋の風』」

そのスペルで咲夜のナイフは斬り落とされ無効化される……

そのスペルを唱えたのはあの時助けた魼だったのだ。

「あの時の御恩を返しに来ました」

すると魼の周りに風が纏われ見えなくなり風が止むとそこには毛皮を来た妖怪が居たのだ……

「我が鎌鼬は御恩を仕えて返すのが通りでしてね。」

鎌鼬は両腕にある鉤爪を研ぎ戦闘体制に入った……そして戦況は一転する……

第8話 図書館と分身

あの助けた魼は咲夜のナイフを風で斬り裂き本当の姿となり男が毛皮を被り鉤爪を付け尻尾がある姿……妖怪である。

鎌鼬……昔の話では風と共に動き、痛みを感じさせない斬撃で相手を痛ぶる妖怪である。だが、使い方によってその力は一気に変わるのだ。

「鎌鼬……なるほど……私にとっては難敵ですね……」

「此処はお任せ下さい、貴方には何か目的がありこの館に居るのでしょうか？それを完遂しなければ……」

「あ、ありがとうな」

恭輔は咲夜の横の廊下に駆け出し始めた。

「逃がしませんよ！」

咲夜が恭輔に向けてナイフを投げる。

「だからあなたの相手は俺だって言ってるだろ」

カキイン……

鎌鼬は先回りし鉤爪でナイフを弾く……

「くっ……後はパチュリー様に任せるしかないようですね……」

咲夜は恭輔を追う事を辞め目の前にいる鎌鼬を睨む。

「俺はな、あの人に助けられて貰って恩を返したく願った……………だから俺は此処であの人の為に命を張れる。命を懸けて戦える！」

「私もお嬢様の為ならばこの命を捨てても良い……………貴方の心境は理解出来ます。ですがこの場は譲れませんので」

そして間を詰め、咲夜のナイフと鎌鼬の鉤爪は鏝迫り合い状態になり戦いが始まった。

恭輔は廊下を走り続ける……………途中でメイドが居たがスルーして着いたのは図書館だった……………

「この蔵書量凄いな……………人生一つ使っても読みきれなさそうだな」
すると図書館の薄暗い場所に地下階段を見つけた……………

ざわ……………ざわ……………

「この空気、嫌な予感が……………行くしかないか」

その時、巨大な火球が恭輔に飛んできたのだ。

「なっ！？砂符『サンドマニユプレート』！」

ボンッ！

砂を動かし火球を砂で包み内部爆発を起こさせた……

「あつぶな……………」

「その貴方、その階段に行くのは辞めなさい……………」

そこには空中に浮く女性が2人、パチュリーと小悪魔だった。

「嫌だね、好奇心に勝てる物は無いからな」

「はあ……………手遅れになる前に止めるしか無いのね……………」

パチュリーは本を開く……………ただの本ではない、魔力を帯びた本、魔導書だ。

すると恭輔の四肢が一気に地面に落ちた……………

ドゴオンッ！

「がっ……………」

恭輔の四肢に何か光の輪が付いていて一気に重量が増して地面にめり込んでいた。

「動きを止めるだけなら楽ね……………小悪魔、縛りなさい」

「は、はいっ！」

小悪魔が縄を持ち恭輔に近づくと恭輔が起き上がり始めた。

「こっ……こんな重量で……止められる……とでも?」

「おかしいわね……腕一本の重さを500kgにしたのだけど……
……もっと重くすべきかしら」

ズンッ!

「ぐっ……」

メキメキメキメキ……

更に重量が増し恭輔の四肢からは軋み音が出始めた……恭輔の体に掛かっている負荷は合計3tだった……それでも恭輔は立っていた……特訓の成果だ

「ちょっと……まずいか……」

「気絶してくれれば楽ね」

パチュリーの掌には雷弾が浮いている……それを恭輔に向けた……
……その雷弾は恭輔に射出された……

ズオオオオオ……

その時、恭輔の目の前の床からドス黒い妖力が溢れ出し雷弾の軌道を遮り吸収した。

「っっ!?!?」

「何……あの妖力……」

その妖力の穴から人型が出現した。顔が無かったが全身から黒い妖力が漏れ出していた。ある人物のトークンだ。

トークンが恭輔の四肢の光の輪を睨むと光の輪は消滅した。

「……………(クイツ)」

トークンが首を動かす先には階段……………行けというサインだ。

「行けって事なのか？」

「……………(コクツ)」

「了解！あだっ！あだだだだ！」

ゴロゴロゴロ……………ゴンツッ！

恭輔は急に階段を降りた為足を踏み外し下まで転がって行った。

「あたたたた……………」

恭輔が頭を抱えていると……………

「アナタ、だアレ？新しい遊ビ相テなの？」

牢屋の中には……………血だらけの少女と重症を負った青年が倒れていた……………

紅魔館の外では……

「さーて、見させて貰うか……お前の戦いつて奴を……融にやっ
た妖力も膨大な物だったが俺にとって微量だしな」

紅魔館上空で1人の男が浮いている……この人物が融に妖力を与
えた張本人だ。

「満月が近い……急がないと手遅れになるかもな……」

月を見ると後数十分で満月になる所だったのだ……

第9話 吸血鬼姉妹

恭輔はフランと対峙していた……………

「まさかとは思つが……………君が吸血鬼なのか？」

「ソウだよ。もうコのオモチャに八飽きたよ……………」

声が完全に狂っていた。正気ではないのは明白だ。すると大きな大剣を倒れている青年に突き刺す。

「うづう……………がつ！」

グシャツ！グシャグシャ……………

その大きな大剣で青年にトドメを刺しどんどん壊していく……………血が恭輔の頬に飛び散る……………そして人の原型は無くなった……………

「今度は貴方が遊んでくれルんでシヨ？」

その瞬間、フランは大剣を振り牢の鉄格子を切り裂いてきたのだ。

恭輔は間一髪で避ける……………

「なるほど……………人の命を簡単に消しやがって……………好奇心とか言つてられねえ。貴様を教育する……………」

恭輔はキレた……………命を粗末にする者が目の前に居るからだ。不慮の事故で命を一度失った恭輔には人一倍命の重さが分かるのだ……………

「あははははっ！ヤツテご覧ヨ！禁忌『フォーオブアカインド』」
するとレーヴァティンを持ったフランが4人に分裂したのだ。

「くそがつ！岩符『ロックブラスト』」

恭輔は牢屋の敷石を飛ばし攻撃するがフランの力で爆発し消炭になる。

「弱イよ、もっと楽しませてよ！」

フラン4人は一斉に多方向から剣を振るった……………

「鉱符……………」

その4本の剣を黄色鉱石、緑鉱石、青鉱石、赤鉱石で全てガードしていた。そしてフランとの間を開ける

「お前に痛さと恐怖というのを教えてやるよ」

すると新たなスペルカードが出来上がった……………

地符『ロックスピリット』

「地符『ロックスピリット』……………」

そのスペルを唱えると恭輔の周りから石のゴーレムが3体出現した。フラン4人に対抗出来るスペルなのだ。

ガキイイン……………

フランのレーヴァテイン、恭輔よサファイアブレイドの刃はぶつかり合っ……

「人間ノクセにやルね……私ト渡りあうなんて……」

「黙れ……」

恭輔はフランの大剣を狙って剣を叩いた。

「何がしたいノ？……っ！」

フランはすぐに腕の異変に気づいた。フランの腕が痺れて動かない。

「鉞符『ルビーストライク』」

恭輔は鉞石をフランに撃ち出し直撃させ怯ませる……

「くっ……ア……」

そしてフランの服を掴む……

「てめえに剣は使わねえ……拳で充分だ！」

恭輔は剣を捨てフランの顔面を本気でぶん殴った。そしてフランの歯が宙に飛ぶ。

バキィッ！ドサッ……

「は、歯ガ……」

フランは自分の頬を抑え恭輔を見る。そして再びフランを掴む……

「あ？痛いってか？ああ、痛いさ。だったらためえが殺した人の事を考える、お前に殺された生きたくても殺された人間の痛みをな！」

「グ……………」

ザシュツ……………

フランは掴まれている時に恭輔の脇腹にレーヴァティンを突き刺した……………

「ぐつ……………ふざけた真似を！」

恭輔はフランを再度殴り飛ばす……………その弾みでレーヴァティンは脇腹から抜ける……………

「い、痛い……………痛いヨお……………」

フランの眼からは涙が流れていたが恭輔はお構い無しだ。

「うるせえ……………良いか、死んだ人はそんなチヤチな痛みより比べ物にならない痛みを受けたんだよ。分かるか？お前は壊す事しか出来ないのか？今考えてみる、お前が殺した人々の事を思ってみる。それを自分がされる側だと思える。そして痛みを考える。命の重さを考える。分かるか？お前はその罪を背負って生きなきゃなんねえんだよ！」

「っ……………！」

そしてフランは抵抗を辞めた……………レーヴァティンも地面に落ち、他のフランも消えた……………するとフランの口から声が聞こえた……………

「…なさい……………ごめんなさい……………ごめん……………なさい……………ごめんなさい……………」

フランは目から涙を大量に流し謝っていた……………そして恭輔はフランから手を離しフランが地面に落ち……………

「まだ更生は出来る……………反省したら俺の所に来るんだな……………」

そして恭輔はその場から立ち去った……………

フランはその場で子供が大泣きする様に泣いていた……………自分の罪の重さを自覚した……………

各地……………

鎌鼬視点……………

「投降して貰えませんか？……………殺したくはないんで……………」

鎌鼬が咲夜の首筋に鉤爪を当てる。咲夜の周り全てには風が宙に止まり刃と化した凶器があった……………

「わ、分かったわ……………負けを認めるわ……………」

「OK、だが縛らさせて貰うよ」「

鎌鼬は風を解き無抵抗の咲夜を両腕を後ろで縛り連れて行く……

トークン視点……

「日符『ロイヤルフレア』！」

パチュリーはトークンに向け擬似太陽の光線を浴びさせた……

異常な閃光で周りが見えないが消し飛ばしたかとパチュリーは思ったが全くの無傷なのだ……

「……………」

トークンは妖力に形付け槍を作る……その瞬間その場から移動しパチュリーの真後ろに居たのだ。

「なっ!?!」

そしてパチュリーの宙から地面に叩きつけ動きを封じた……

「う、動かない……………」

「……………」

恭輔視点……………

「出血が……」

恭輔は脇腹を抑えて歩く……刺さった部分から血が止まらなかった。

「貴方が侵入者なのね。良くフラン相手に生きてたわね」

前から声がする……レミリアだ。

「うるせえ、お前が姉か？妹の管理も出来ないガキが……アレはお前の性である様になったも同然だ……」

レミリアは平静な顔だったが怒りは隠せなかった。

「黙りなさい……それ以上言つと殺すわよ」

「殺す？上等だ！やってみろよ！」

「その言葉通り……殺してやるわ！」

レミリアは腕から小型の妖力の槍を作り投げ出す。

「鉾符『トパーズシールド』」

その小型の槍を防ぎ斬りかかりに行こうした時、傷が痛み動きが鈍る……

「隙だらけね。神槍『スピア・ザ・グングニル』……」

先程より大型の槍を作り出し投げ出した……

その槍は恭輔目掛けて飛ぶ……………そして直撃したかと思いきや……………

「全く……………無茶にも程があるな……………」

恭輔の目の前には風也が立っていた……………レミリアの全力のグングニルを指1本で止め涼しい顔をしていた。

「なっ!?!何者!?!」

レミリアも驚きを隠せなかった。全力のスペルが指で止められているのだから。

「貴方は?」

「一端の妖怪さ。いいや……………化け物の方が合ってるか……………」

そして風也はグングニルを闘気で消滅させた……………

「なっ!?!」

「温い温い。もっとまともなスペルは無いのかい?レミリア・スカ

ーレット……………」

「くっ……………」

レミリアは怖じ気付いていた。相手と対峙して感じる強者の威圧に押されていた……………

そしてレミリアは風也の上空に移動する……

「その言葉通りラストスペルで消し炭にしてあげるわ！紅魔『スカーレットデビル』！！」

レミリアの全身から紅い妖力が放出され風也を飲み込む……触れただけでも焼き尽くす様な妖力で……

「はぁ……まだ力の1万分の1も出してないのにこれが……」

妖力に飲み込まれながらもレミリアを首を掴む……全く効いていない……

「なっ……う……そ……」

「なあに、殺しはしない。眠って貰うだけだ」

そして風也は黒く変色した眼でレミリアを睨む……するとレミリアは気を失った……

「大丈夫か……って、治療しないとまずいな……」

その時。

「お嬢様！！」

「おいっ！待て！」

声が聞こえる方向を向くと手を縛られた咲夜と鎌鼬の姿があった。

「殺してはいない……眠ってるだけだ。」

「貴方は……あの時の妖力をありがとうございます」

「お礼は良いからその妖怪君、こいつも竹林の医者に運んでやれ」

風也は恭輔を掴み鎌鼬に投げつける。

「あ、はい」

「急げよ。血がやばいんだ」

ガシャーンッ！

そして窓を割ってから紅魔館の外へ出た。

「さて、俺も消えるぜ……」

そして風也はその場から消え去る……黒い妖力となって外に流れて行った。

ガサガサッ……

鎌鼬は風の早さで竹林を搜索していた。

「竹林って言うと……此処るか？あ、見つけた」

鎌鼬は永遠亭を見つけドアを叩く。

「此処が医者だと聞いたんだ！誰か居るか！？」

その大声が竹林に響く……………

第10話 新月の襲撃

風也が幻想郷を去り月夜はレミリアを護る為日々自分を磨いていた。

そして月夜はある日、パチュリーに呼ばれ図書館に赴いていた。

「パチュリー様、何か御用でしょうか？」

「ええ、貴女に折り言っただけ頼みたい事があるのよ。今日の夜が新月だと言う事は知ってるわね？」

「はい、それが一体？」

「実は新月の夜の日はレミィやフランの力が一番弱まる頃なのよ、だからお願い事があるの」

そしてパチュリーは立ち上がり月夜の前に立つ。

「美鈴と共に門前で妖魔の群れを潰して欲しいの。」

「妖魔の……群れ？」

「ええ、風也が居る頃に一度襲われたのだけど1人で壊滅させてそれ以降来なかったのだけど、脅威が居なくなったのを分かっただけで再度襲って来るのよ」

月夜は驚いていた……風也にもレミリアにもその事は聞かされていない……

「レミイの事だし、貴女が大事だから言わなかったのかもね」

「そうですね……それを、やらせて下さい」

月夜はすぐに了承した。お嬢様を、レミリアを守る事が約束だからだ。風也と咲夜に頼まれた一番の事……

そして時は過ぎ……夜となった……月が無く、門の周りは真っ暗で見えない。唯一の灯り、門の照明に照らされて居るのは美鈴と月夜の姿だ……

「そろそろ……ですね」

「月夜さん、油断は禁物ですよ。襲ってくる妖魔は厄介なのしか来ないので……」

「分かって居ます。お父様とお母様の約束を果たす為です。死ぬ訳には行きません」

ガシャツガシャツ……

月夜は風也に託されたサブマシンガンを何時でも撃てる様にセットした……

その瞬間、暗闇の中から小型の妖魔が突っ込んできた……

「はあっ！」

美鈴は飛び出した妖魔に本気の蹴りを胴体に入れ、妖魔の体は2つに千切れた……

メキメキ……ブチィッ!

「流石美鈴さん、お強いですね」

それを確認し月夜は駆け出し、悪魔型の妖魔の肩を踏み台にして上空からサブマシンガンで蜂の巣にする……

タタタタタタタッ

弾の雨を全身に食らい獣型妖魔は絶命した……そして月夜は踏み台にした悪魔型の妖魔の頭に大型ナイフを投げて突き刺した……

「これで3つ……ぐっ!」

ガシャーンッ!

その時、月夜は巨大な腕に直撃し門にぶつかり門の鉄格子がひん曲がった……

「月夜さん、大丈夫ですか?」

美鈴に手を引かれ月夜は立ち上がった。

「ええ、何とか……美鈴さん!後ろ!」

その時騎士型の妖魔4体が美鈴を襲った……

「これは……」

美鈴の両腕が鎖で捕まり妖魔の力で動きが止められる……

ジャラ……………

すると槍を持つ騎士型妖魔が美鈴に突っ込んで来たが美鈴は蹴り飛ばし難を逃れたと思ったがそれはブラフだった……………

その蹴り上げられた騎士型妖魔の後ろにもう一体突っ込んで来た……

「なっ!?!」

ザシュツ……………ポタ……………ポタポタ……………

美鈴の胸に剣が突き刺さり血が滴る……………

月夜は獣人妖魔複数に足止めされ助けに行く事が出来なかった……………

「美鈴さん!!どいて!」

月夜は瞬時に獣人の頭を全員撃ち抜き騎士型妖魔に銃を放つ……………

カカカンッ!

弾は貫かず鎧に弾かれた……………

騎士型妖魔は美鈴の胸から剣を引き抜きもう2体の妖魔も美鈴の腕から鎖を解く……………そして月夜の方を向いた。

その瞬間、月夜は時を止め美鈴を救出した。少し離れた所で時を動

かしそして美鈴は血を吐きながら喋る……

「がはっ……………月夜さん……………私の事は良いですから妖魔を……………」

「美鈴さん、喋らないで！傷に障ります……………」

「すみません……………」

月夜は美鈴を門の壁に寄りかからせ安静にさせる……………

「さて、私もあの力を使わせて貰います……………」

すると月夜の全身から黒い妖力が溢れ出した……………それは全身を包む様に……………

「……………『魔装』」

その妖力はコントロールされているかの様に月夜を完全に包んだ。

そしてその包んだ妖力が晴れると黒いメイド服を着た弓を持つ月夜の姿があつた……………

「あの力……………風也さんに似てる？」

「お父様は火力と硬さに特化された魔装……………私は……………早さと火力と正確さ特化の魔装なんですよ……………」

月夜はその場から瞬間移動し弓を上空から構える……………

「弓符『レインアロー』」

月夜の弓から放たれた一本の矢は途中から分裂し始め数百本に増え地上に居る妖魔を一網打尽にする……

ドドドドドドツッ！

「遅い……遅過ぎるっ！」

月夜は矢を次々と放ち妖魔の頭を的確に撃ち抜いていく……

すると小型の妖魔は壊滅し残りは数体の大型妖魔だけとなった……

大型妖魔は怯えていた……あの悪夢の再来なのだと実感していた

……巨人型妖魔は前の新月襲撃にも関わって居たらしく隻腕だったのだ……その腕は風也に切り落とされた物だ……

【シャー……ッ！】

大型蜘蛛型妖魔は月夜に突撃し牙で噛みちぎろうとした……

「蜘蛛には火がお似合いですよ……」

月夜は既に弓を構えていた……引き絞っていた矢は赤く光っていた

……

「矢符『フレイムアロー』」

矢から手を離し放たれた矢は蜘蛛に直撃する……普通の矢では致命傷にもならない……その矢は炎を伴っていた。

ドゴンッ！

矢が大爆発を起こし蜘蛛の頭は形残らず吹き飛ば……………蜘蛛の体液が飛び散る……………

「後は……………あの巨人型と遠くで感じる小型妖魔数百体程ですか……………」

すると巨人型妖魔は恐怖心で逃げ始めた……………己の命を守る為に……………

「逃がしませんよ……………」

ギリギリギリギリ……………

月夜が弓の弦を引く音が大きく聞こえる……………矢は電流を帯びて居る……………

「さようなら……………」

電流を帯びた矢は弓から撃ち放たれ電光石火の如くの早さで巨人の頭を首から吹き飛ばした……………巨人から見れば小さな矢がその首を吹き飛ばした……………

ズウン……………

「さて、後は掃討しなければ……………」

そして朝……美鈴が起きると剣が刺さった場所が止血されて痛みも引いていた……

美鈴の横には疲れて寝ていた月夜の姿が……きっと掃討後に治療してその場に居たのだらうと美鈴はすぐに分かった。

「月夜さん、ありがとうございます」

そして美鈴は月夜をお姫様抱っこで抱え月夜の自室で寝かせてあげた……

そして門の周りをよく見ると矢が刺さった妖魔の死体が数えきれない程倒れていた……

「まさか……この数を一晩で……」

美鈴は月夜の計り知れない実力に疑問が浮上してきた……風也以上の実力の月夜に……

第11話 呪いの解呪

恭輔が紅魔館襲撃してから2日が経つ……………

その本人は、重症だったが永遠亭に無事運ばれた……

運ばれた直後……

まだ名前の無い鮎は恭輔の肩を担ぎ扉の前に立っていた。

「おい！ここが医者なんだろう！」

「はい、そうですけど……………っ！」

優曇華はその光景を見て驚いた……………妖怪が居るのは普通だ、だけど重症で腹部が血まみれになった人間が居るからだ……………

「師匠！！急患です！」

「人間かしら？妖怪？」

「人間ですよ！腹部の傷から血が止まらなくて……………」

そして患者用ベッドに寝かされた恭輔を見て驚く……………

「この人は……………」

「師匠……………？」

「優曇華、緊急手術をするわよ。この人は死なせてはいけないわ」

「は、はいっ！」

そして永琳と優曇華の2人によって治療が開始した……

「優曇華、その薬を取って頂戴。」

「はい、師匠」

優曇華は薬棚からある薬瓶を取り永琳に渡す。

「師匠があんなに必死になるなんて……何時もの治療とは雰囲気
が……」

「この人には『あの薬』は使いたく無いわ……自分の手で治す……」

そして決死の手術は数時間に渡り続いたのだ……

そして鎌鼬は表の部屋でずっと待っていた……治療が終わるまで

……

すると奥の部屋から服に血のついた永琳が出てきた。

「あの人は!？」

「……………」

鎌鼬の問いに永琳は黙っていた……鎌鼬はそれを察した。

「まさか助けられなかったとか言っつんじゃないだろうな！」

鎌鼬は永琳の胸ぐらを力強く掴む……そこに優曇華が割り込んで来た。

「落ち着いて下さい！師匠は最善を尽くしました！血も止め、傷口も塞いだんです！」

「じゃあ何故！」

鎌鼬の本気の問いに永琳は答えた……

「何かの力が……あの人に施されているのよ……あの類は……恐らく呪い………」

「呪い……だと？」

永琳の胸ぐらから手を離し椅子に倒れ込む……

「呪術に関しては専門外なの……助けたいけど……保って数時間よ……全身に呪いで染まれば……命を落とす………」

「嘘だろ………」

そして絶望が包む気しかなかった……

幻想郷某所……

崖の上に風也が1人立っていた……そして永遠亭の方向に何かを感じていた……

「それで気配を消したつもりか？出て来い」

「私の気配を感知するとは……流石ですね……」

風也の真後ろから黒装束が空間から出現した。

「貴様……あいつに呪いをかけたな？巧妙な呪術だ……それも遅効性とは」

「フッフ……それもお見通しという訳ですか……」

「一度しか言わん……呪いを解け……」

遠くを見ながら風也は体から殺気を湧き出す……目に見える様な禍々しい殺気が……

「貴方にそれが出来るのですか？」

すると同じ様な殺気が黒装束からも出たのだ……

「っ……」

「私達は……あの異変後に貴方の妖力を集め貴方と同じ力を得たのですよ……」

その瞬間、黒装束は黒い布が弾け飛び青い甲殻に纏われ両肩に目……

…あの異変の風也と同じ姿があった……

「そうか……………なら殺してでも解かせて貰う……………」

ドスッ……………

風也が立ち振り向こうとした時、黒装束の腕が風也の胴体を貫いていた。

『あの姿にさせなければただの人間同然なんでしょう?』

ポタ……………ポタ……………

風也の口からは血が溢れ、血が地面を紅く染めて行く……………

「残念だったな……………良い事教えてやるよ……………その力が知れた物という事をな……………」

ボギンッ!

『なっ!??ああああああ!??』

黒装束は悲鳴を上げた……………突き刺した腕がいと簡単に風也にへし折られていた……………

「この腕がどうしたんだ?」

『きつ、貴様!!!』

風也はへし折った腕を捨て突き出された腕を掴み取る……………

ミシミシミシッ……ドゴンッ！

そして腕を掴んだまま投げ飛ばし岩壁に直撃させ蹴りを壁諸共ぶち込んだ……

『がっ………』

「さて、俺は退散させて貰う………」

『待て！まだ勝負……は？』

風也が立ち去りそれを止めようとした時黒装束の体が膨らみ始めた

……

『なっ……んだ……これ……？あ！？』

ボンッ！ビシャッ！

体が破裂し肉片と化した……周りには鮮血で紅く染まる……

「俺の妖力を使ったのが敗因だ……操作も容易い………」

風也の傷は完全に消え、服の穴も妖力で復元していた……

そして風也は爆発現場に戻り血の中から白く輝く魔石の様な物を拾った……

「これか……さて、永遠亭に行くか………」

そして永遠亭前に転移魔法で移動して行った……

永遠亭では……

「どうすれば……」

「呪術に得意な者は居ないのよ……」

永琳と鎌鼬が落ちこんでいると……

バキヤツ！

「あ……力入れ過ぎた……」

ドアを砕いた風也の姿があった……

「貴方……何者かしら？」

「此処にあいつが居るんだろ？案内しろ……」

「患者に怪しい者は会わせられないわ……」

風也の後ろにはハンドガンを構えた優曇華が立つ……

「怪しい……だろうな……だが一刻を争うんだろ？」

そして風也が一步步こつとすると……

「動かないで！動くと撃つ！」

「撃つてみるよ……無駄だと分かる……」

「っ！？」

パンツッ！……ドサッ……

優曇華は驚いた拍子に風也の頭を撃ち抜き風也が倒れた……

「はあ……はあ……」

優曇華は緊張で息が上がっていた……

「無駄だと言つたろ……」

頭を撃ち抜かれ死ぬ筈の風也は立ち上がり頭を貫通した傷が妖力で塞がれた……

「っ！？」

「貴方……蓬萊人……なの？」

「蓬萊の薬なんて飲んでないさ……ただの不死の化け物とだけ言うておく……案内しろ……」

「わ、分かつたわ……」

そして永琳は止む終えなく恭輔が居る部屋へ連れて行く……

「やはり呪いだな……」

(こいつには俺には出来なかったある事を成し遂げて欲しいからな
……………)

何かを呟いた後、風也は魔石を傷に置いた……………すると魔石が濁り
始め、恭輔の顔色が良くなったのだ。

それを確認した後、魔石を回収した。

「これで呪いは消えた……………後の処置は任せる……………じゃあな……………」

そして風也は永遠亭から姿を消した……………前触れもなく……………

「とりあえず安心なのね……………あの子にも伝えないと」

「あの人は……………一体……………」

永林は安堵していたが優曇華は風也に恐怖感を抱いていた……………

その後、鎌鼬に無事を報告し、その数日後に恭輔は目を覚ました……………

「あれ……………此処は？」

「永遠亭という医者 of 居る場所です」

恭輔が起きるとベッドの横には鎌鼬が座っていた……………

「ありがとうございます……………えーつと名前は？」

「名前なんて無いんですよ……………今まで普通の鼬でしたので。拾われ

た命です。貴方が名前を付けて下さい」

恭輔は急に命名してくれと言われ焦った……

「じゃあ風に因んで『風昌』かぜまさなんてどうかかな？」

「ありがとうございます。これからはこの風昌が命を賭して貴方を守ります」

そして恭輔と風昌は助け合った同士となり恭輔に仕える妖怪として主従関係が出来た……

第12話 覚醒する宵闇の妖怪

永遠亭……………

「さて……………守矢神社に帰らないと……………いつつ……………」

恭輔は無理に帰ろうとして傷を抑えた……………

「無茶しないで下さい。傷が完治するまで此処で安静にして下さい。」

「そうよ、傷が開く可能性もあるわ」

鎌鼬が止めていると後ろから永琳が居たのだ。

恭輔は永琳に見覚えがあり、永琳も恭輔に見覚えがあった。

「貴女は……………」

「ええ、会うのは二度目ね。あの時はありがとうございます」

永琳は恭輔に深々と頭を下げる。

「いや、俺も治療して貰った訳だしこっちこそお礼が言いたい位ですよ。ありがとうございます」

恭輔も永琳に頭を下げる。

「名前を覚えてなかったわね、私は八意永琳。此処、永遠亭で医者

をしているのよ」

「じゃあまた怪我したらお世話になっても良いですかね？」

「ええ、大歓迎よ。その度に治してあげるわ」

そして恭輔は怪我した体を無理に起こす。

「じゃあそろそろ帰りますよ……………いつ……………」

「無理はしない方が良いわよ？」

「いえ、黙って神社から抜け出して来たので怒られる頻度を下げ
る為に早く帰らないと……………」

「なるほどね、気をつけて帰るのよ。夜は危険だから……………」

「分かった」

この永琳の『夜は危険だから』という言葉が本当に起こる物とは
まだ思っ居なかった……………

そして風昌と恭輔は夜が明ける前に守矢神社に戻る為、歩き始めた。
竹林は迷い易いらしく竹林を出るまで優曇華に道案内をして貰った。

「後は早めに山頂に行かないと……………」

「ええ、厄介な妖怪に出会ったらヤバいですね」

そして恭輔と風昌は早歩きで妖怪の山を登って行く……………

2人は尋常ではない殺気を感じた……

「っ!?」

その瞬間、暗闇から大剣が投げられて来たのだ。

「危ないっ!」

ガキインツ!

風昌は鉤爪を装着し大剣が恭輔の方向に弾かない様に真横に軌道を逸らした……

「ほう……あれを弾くか……他の妖怪よりは腕に覚えがある様だ……」

茂みの中からは黒い服を着た金髪の女性が出てきたのだ……殺気を纏いながら……

「なんだアンタは……」

「主人、お気をつけて下さい。こいつも妖怪です」

「おいおい……」
「ハ鋳符『サファイアブレイド』」

恭輔は小声でスペルを唱え青い鋳石の大剣を地面から引き抜く。

風昌は鉤爪で突き刺しを狙い突っ込む。だがそいつには無力だった

……

「がはっ……」

風昌の腕が払われ妖怪のハイキックが胴に直撃し木にぶつかる……

「風昌！！貴様……名前は？」

「ルーミアだ……手合わせ願おうか」

ルーミアも先ほど投げた大剣を地面から引き抜き構えた。

そして恭輔とルーミアは同時に突っ込み大剣同士がぶつかり合う……
…そして刃と刃が削れる音がした。

ギャリリッ……

「ほう……人間にしては力があるじゃないか。少しは本気を出しても良さそうだ。」

するとルーミアは一瞬だけ大剣に力を込め恭輔の大剣を大きく弾いた。

「なっ！？」

恭輔は反動で後ろに体が逸れ、それを戻す為にそのまま一回転した。

「くそっ……傷が……」

恭輔の腹部から血が滲み始めたのだ。あんなに動けば傷が開くのもおかしくは無い。

「させんっ！」

風昌が2本の刀を両手で持ち真後ろからルーミアを強襲する。

ガキインツ！

2本の刀はルーミアの大剣で防がれていた。

「まだ元気があつたのか……」

「黙れ！0距離でこれは避けれまい！風符『序の風』！」

風昌の体から大量の風が暴発し自分ごとルーミアを風で飲み飲んだ。

恭輔が砂煙で目を腕で抑えて砂煙が晴れた時、ルーミアを見ると風昌の胸をルーミアの大剣が貫いていた……

「がはっ……あれを耐える……のか……」

ルーミアは大剣を引き抜き倒れる風昌を見る。

「あのスペルは威力は流石だったが使いこなしていないな」

「く、くそっ……」

ルーミアの服の一部が破けたりしていたがほぼ無傷だった……風昌は出血と傷で意識を失った。

「風昌！！ルーミア貴様あああああ！！！」

恭輔は怒りに任せ剣を振り下ろした……ルーミアが力押しされ一瞬怯んだ。

「ぐっ………やっと剣に迷いが無くなったのか……面白くなりそうだ……」

「黙れ黙れ黙れ黙れ！！貴様だけは！鉦符『ルビームテオ』！」
すると半径10m程の巨大な鉦石を手から撃ち出した。

「スペルのランクが上がった！？ぐっ………」

巨大な鉦石を大剣で防いだが強力過ぎて40m以上後退させられた……

「ならば……これはどうだい？」

ルーミアが大剣を高く掲げると剣の先から黒い妖力が丸く溜まり始めた……

「これは防げるのかな！」

剣を振りその膨大な妖力の塊は恭輔に向け突撃し始めた……

「鉦符『トパーズガーディアン』」

恭輔の目の前に黄色い鉦石で出来た巨大な盾が盛り上がり、その盾は攻撃の妖力を吸収し始め無力化した……

「き、吸収……した？」

「鉾符『サファイアエッジ』……」

そのスペルを唱えるとサファイアブレイドの形状が変わり更に巨大な大剣と化した……

「なっ!？」

「このやろおおおがあああ!!」

恭輔は重量を無視した感で大剣をルーミアに振り下ろす……

ガギャアアンツ!バキツ!

その振りでルーミアの大剣をいとも簡単にへし折り何故かルーミアに当てず少し右に逸らしていた……

「そ、逸らした？」

「はあ……はあ……」

ドサツ……

恭輔は精神的負荷で気を失った……風昌はその時には意識を戻し自分の傷に薬草を練りこんで血を止めたが激痛で気絶した……

ルーミアは倒れた恭輔を見る……

「なるほど……感情でこんなにも強くなるとは……連いて行っ

ても損はなさそうだ……」

そしてルーミアは恭輔と風冒を担ぎ守矢神社へと向かった……

第13話 説教、人里

はい、どうも恭輔です。こんな良い天気朝ですが……私は正座させられてます。そりゃあ神社抜け出して紅魔館に行って怪我してくれば怒られますよNE

まあ朝から振り替えようか……アハハ……（汗）

「こらっ！何喋ってるの！」

「すっ、すいませんんんんん！！」（土下座）

早朝の守矢神社……

「……………んあ……………俺寝てた？」

恭輔が起きると、そこは守矢神社の恭輔の部屋だ……まだ何も無い部屋である。何故か体が重く起き上がれなかったが……

「おー、お兄ちゃん起きたのかー」

その声の元は、体が重いと感ずる原因だった……そうルーミアだ。

「ま、まさかルーミア？」

「そーなのだー。このリボンで力を抑えてるのー」

「ふむふむ、まさか俺を此処に運んだのも？」

「わたしのだー」

ぼかーん……………

恭輔絶句。というか「そーなのだー」連発……………まあ良いかー

するとそこには元気な風昌が部屋に来たのだ。

「お、主人も起きましたか」

「大丈夫なのかー？」

「傷なら塞がったので大丈夫です。」

「それは良かった。ってルーミアと仲良くなってるな……………」

すると風昌が言い辛そうに口を開く……………

「あのー主人、実は私の後ろに怒ってる方が一名……………」

苦笑いな風昌が指を指す方向には笑っている様で超怒っている諏訪子の姿が……………

「い”っ!？」

「恭輔くーん? 紅魔館は行って駄目って言ったよなー?」

激怒の諏訪子から顔を背ける恭輔。

「ソ、ソウデシタツケ？（棒）」

「恭輔君！そこに正座しなさい！」

「はいっ！！」

恭輔はその言葉と同時に正座で座る。

「君はつくづく1人で突っ込む事が多過ぎるよ！」

「ハイ、スイマセン」

「君は修業の時も危ない行為を（ry）」グチグチグチグチ

「南無……」

「惨いのだー……」

この説教は丸5時間続きました

そして説教から解放され自室に居る3人……

「風昌もルーミアも助けてくれよ……」

「流石に神様には逆らえませんが……」

「無理なのだー」（カミカミ

そしてルーミアは恭輔の手を甘噛みしていた……

「ルーミア……手を噛まないで……」

「はむはむ……駄目なのか」

「勘弁してください」

「そーなのかー……（しょぼーん）」

手から口を離し落ち込むルーミア……

「そーいやあの時このリボン無かったよな？取れやすいの？」

「あ、それは……」

バチバチバチツ

「あつづあああ！？」

リボンの表面に結界があつたらしく恭輔は熱くて悶絶状態になった……

「言う前に触っちゃ駄目なのだー」

すると風冒から提案が出た。

「とりあえず明日から人里に行ってみては如何ですか？」

「そーするのだー。私の友達にも会わせるのだー」

とりあえず2人の提案を呑む事にし明日の朝一に人里を回る事にした。

翌朝……………

「此処が人里ねえ……………」

恭輔、風昌、ルーミアの3人は人里を歩いていた。

「意外に賑やかでしょう？此処には寺子屋もあるんですよ」

「寺子屋には友達もいるのだ」

「ほほう、じゃあ行って見るか」

そしてルーミアは寺子屋の扉を開けた。

「せんせー！来たのだ」

「ルーミアじゃないか、おはよう」

「おはようなのだ」

ルーミアが先生と呼ぶその人は雰囲気から先生オーラを発していた

……………

「おや？ルーミア、知り合いか？」

「外来人のお兄ちゃんと風昌なのだー」

ルーミアは簡単に紹介していきその先生も自己紹介をしてきた。

「なるほど、外来人と妖怪か、私は上白沢慧音だ。この寺子屋で講師をしている」

「俺は霧生恭輔、よろしくお願いします。」

「私は風昌と申します。鼬の妖怪です。」

自己紹介が終わり、一息つこうとした時、恭輔に向け氷塊が飛んできた……

カンッ

風昌が氷塊を弾きそれが飛ぶ方向を見ると羽のある小さな子供が2人……

「アンタつよそーだからアタイと戦う運命なのよ!」

「ち、チルノちゃん駄目だよ……」

「はぁ……風昌、相手してやってくれ……」

「御意」

すると風昌はチルノを掴み外にぶん投げた……

「あんたがアタイの相手ってわけね！氷づけにしてやるわ！」

室内……………

愚痴り合う恭輔ともう一人の子供……

「苦勞してるんだね……………君……………」

「でもチルノちゃんは良い子ですよ。私の親友ですので。あっ、紹介が遅れました大妖精と言います。」

「まあ風昌に任せておけば数分で鎮まると思うよ」

「そーなのかー」

その後チルノは風昌に風だけで負け悔しがってたそうなの……………

第14話 春が来ぬ異変

「そっぴや冬が近いなあ……………」

恭輔はルーミア、諏訪子、神奈子とこたつに入っぴのんびりしていいた。

「いやー、本當に寒いのは苦手だよ……………冬眠したい」

「諏訪子、それは私も同感だ。寒い……………」

「そーなのかー」

諏訪子と神奈子は寒くてやる気が出ない様だった。ルーミアは恭輔の膝に座りながらこたつで温まっていた。

早苗は家事を、風昌は情報を集める為、情報に長けた天狗達の里に向かったらしい。

「そろそろ幻想郷に来て2ヶ月か……………早いなあ……………」

「それにしても冬になるのは早過ぎな気がするんだが……………」

そう、現在幻想郷は10月、まだ秋の筈だがもう雪が降っている……………早冬というべきか……………」

「寒いからお布団で寝るね」

そう言っぴと諏訪子は自室に戻って行った。その直後……………」

「主人！！朗報です！！」

雪だらけの姿で風昌が帰ってきたのだ。

「実は天狗の新聞記者と仲良くなって聞いたのですが、この冬は故意的に起こされた可能性がある……」

「へ？故意的に！？」

「そーなのかー」

その風昌の言葉で驚く恭輔……お馴染みの言葉を放つルーミアだった。

「一応連れてきたので話を聞いてもらえれば……」

すると風昌同様に雪だらけの女性が2人現れたのだ。

「どうも、文々。新聞発行者の射命丸文です。あ、これは新聞です。」

文と握手を交わし新聞が渡される……流石記者、宣伝もしっかりしている……すると盾と剣を携える女性も自己紹介し始めた。

「哨戒天狗の犬走椀と申します。」

「とりあえずこの御方達は異変の調査に協力してくれるらしいので」

「風昌さん、後は私が説明しますよ」

そうやって文は説明をし始めた。

「実はこの冬が故意的に起こった事だと風昌さんから聞きましたね？」

「まあね」

「恐らくこの冬は異変なのだと言者の勘で感じているのです。推測ですが、この異変を解決しない限り春は訪れないと……」

「マジか……」

「……」

文の推測を聞きルーミアは絶句、恭輔は驚きを隠せなかった。

「場所は分かったのですか？」

「いえ、まだ正確な場所は発覚していません。ですが恐らく冥界の者の可能性が……」

風昌の問いに椀が答える。

「じゃあ急いで解決しないと……春に花見出来ないし……」

「ですね、では冥界の道順まで案内するので……って貴方飛べますか？」

「飛べないぜ（ドヤア）」

無駄なドヤ顔で答える恭輔、本当に無駄だった……

「いや……ドヤ顔で答えられても……」

「すまん……（シヨボーン）」

「あぁっ！落ち込まないで下さい！私が連れて行きますからっ！」

こうして恭輔、ルーミア、風昌、文、椛の5人は異変調査の為に冥界へ向かった……

少年少女移動中……

「えつくと、文さん」

「何ですか？恭輔さん」

「あのう……胸が当たってます」

恭輔は文から後ろから抱かれている様な掴み方をしているので文の程良い胸が恭輔の背中に当たっていた。

「え？嬉しいんですか？」

「ええっ！嬉しいですよ！男のロマンって奴ですし！」

恭輔と文の絡みを見て風昌と椛は話していた。

「主人は元気が良いですねえ（汗）」

「でも楽しい方じゃないですか。少し変わってますけど」

「普通の人間なら妖怪を恐れる筈なのに心を開いて接してくれますからね」

「お兄ちゃんは良い人なのだー」

話している内に現世と冥界を繋ぐ空域に到着した……………

「うわーお……………落ちたらひとたまりもなさそうだな……………」

恭輔は下を見て奈落の底が見えない景色にびびっていた。

そうして進むうちに冥界に完全に入り、地面がある場所に到着した。

「やっと到着だなー」

5人の周りには数千を超える怨霊、亡霊、アンデッドが待ち構えていた……………

「主人、私達はあまり歓迎されてない様ですよ……………」

「その様ですね……………」

風昌と椛は刀を抜き構える……………

「この数は洒落にならないって……………」

「お兄ちゃんー、リボン外せたら外して欲しいのーだー」

「分かった！そおいつ！」

すると結界が作動せずルーミアのリボンは容易く外れた……………

ズオオオオオ……………

すると黒い闇がルーミアを包み、闇が晴れ、大人の姿をし大剣を持つルーミアの姿が露わになった……………

「さて、これで十分に戦えるな……………」

「体保つのか怪しいなあ……………鉾符『サファイアブレイド』」

恭輔は地面から青い大剣を抜きとった……………

「さて、進む為の前哨戦と行きましようか」

そして最後に文が扇を構え全員が戦闘体制になった……………

そして5人VS数千の戦いが始まった……………

第15話 散り散りになる仲間

「多過ぎるだろっ!」

各個で敵を斬り捨てて行く……………だが数が減っている気がしない……………このままでは体力が尽きるのがオチだ……………

「確かに……………数百は斬ってるのにどんどん来ますね……………」

椀もアンデッドの首を斬り落とし体を盾で殴り吹き飛ばす。

「これは体力の消費がマズい気が……………」

風冒は恭輔とのコンビネーションで両者の後ろに居る怨霊を斬り合い、全く隙が無かった。

文も風を起こし風で敵を薙ぎ払っていた……………

「この数に足止めはされない方が良く……………」

ルーミアは文の方向を向き、文もそれに了解する様に首をうなづく。

「恭輔さん、此処は私とルーミアちゃんに任せて下さい」

「なっ……………!?!」

「ここで全員足止めされては異変は解決出来ませんから……………大丈夫ですよ……………」

「わ、分かった…………た、頼む…………」

悲痛な表情で恭輔は決断した……………椀は予備の刀を文に手渡す……………

「久しぶりですね……………刀を手にするのは……………出世以降触れなかつたからかな……………」

「腕に覚えはある様ね……………」

「恭輔さん！突破口は私が切り開きます！そこを突っ切って下さい！旋符『紅葉扇風』！」

そして扇で巨大な竜巻を起こし怨霊達を吹き飛ばし一筋の道が出来る……………

「行きましょう！主人！」

「ぐ……………すまんっ！」

「文さん……………死なないで下さい……………」

そして開けた道を恭輔、風昌、椀の3人が駆け出す……………

3人が駆け抜け、文とルーミアは数千の敵に囲まれたままだ……………

「これで退路も進路も途絶えましたね……………」

「変わらんだろう……………全て滅せば良いのだから……………」

ルーミアと文は背中合わせて自分の武器を構える……………

「簡単に言いますねえ、私も善処はしますよ……」

そしてルーミアと文は両者背を向けたまま、大群に突入していく……

……

その頃の恭輔……

「数が少ない……大半は彼方に裂かれた様ですね……」

椀は刀でアンデッドを斬り捨て、恭輔は断斬し、風昌も鉤爪で首を飛ばしていた……

その時、3人は殺気を感じる……

「恭輔さん危ない!!」

椀は恭輔を押し倒し怨霊が投げた巨大な鎌を避ける……

「あれは……今までのとは違う様ですね……」

椀が立ち上がり刀を手にしようとすると……

「此処は私に任せて下さい……ああいう厄介な武器相手は慣れて居ますから……」

風昌が椀達の前に立つ……

「でも……」

「貴女は主人について行って下さい、多分まだ相手は居るでしょう……ついでにそろそろ起きてやらないと主人が……」

「へ……………?」

椀が下を見ると椀に乗られて地面に突っ伏している恭輔の姿が……押し倒されて動けない状況だった。

「す、すみませんっ!」

「やっと起きれた……………」

ブォン……………

すると怨霊が5体に分裂したのだ……………それぞれ同じ鎌を手にし……

「早くっ!狙われない内に!」

風昌は5体の鎌を上手く止める……………鉤爪、足に仕込んだ隠し刀で……………

「だ、だけど……………」

「此処で全員全滅するのは避けたい!!此処は俺だけで十分だ!行け!……!」

「恭輔さん、いきますよ!」

「くっ…………死ぬなよ……………」

「分かっていますよ……………」

そして風昌を置き、残った2人は駆け出す……………そして大きな桜が見え始めた……………

「あそこに……………」

すると、目の前に立つ一人の少女が居た……………妖夢だ……………

「この先は通すわけには行きません……………」

「退いてくれ……………この先に進まなきゃならないんだ……………」

「通す義理はありません……………幽々子様にも頼まれているので……………」

そして妖夢は刀を鞘から抜く……………

「私は魂魄妖夢、私を倒せたら進むと良いでしょう……………」

「分かった……………だったら全力でやらせて貰う……………」

恭輔は地面から大剣を引き抜き椀も構えた……………そして各個の戦いが始まった。

幻想郷某所……………

「今回の異変は手を出したくないな……………見させて貰うか……………」

あいつの体に「細工」はしてあるからな……………多少は大丈夫か……
……………」

風也は妖怪の山の上で立って居た……………

第16話 力の暴走、第三の敵

ガキイイン……………

恭輔の大剣、椀の大刀を防ぎ、2人を圧倒する妖夢だ……………

「くっ……………強い！」

「これ程強いとは……………うっ！」

妖夢の一閃により、椀の大刀が斬撃で綺麗にへし折れたのだ……………
そして峰で腹部を打ち抜かれ吹き飛ば……………

「椀！！くそお！！！」

「仲間がやられて動揺してるのですね、それが隙になりますよ……………
……………」

その瞬間……………

「『現世斬』……………」

妖夢がスペルを使い大剣で防御した筈がその大剣は粉々に砕け散つた……………

「がはっ……………」

恭輔のわき腹から肩まで斜めの斬り傷が出来、血が噴き出す……………

「ぐっ……………」

「う……………き、恭輔さん……………」

椀は助けに行こうにも肋が数本折れたらしく立てない……………

「投降すれば……………命までは奪いません……………お願いします……………」

妖夢の慈悲の言葉だ……………だが恭輔はそれを捨てる……………

「俺達は……………異変を解決する為に……………来たんだ……………のこのこと帰る筈が……………」

それを聞き妖夢は目を閉じ溜息をつく……………

「そうですね……………仕方ありませんね、此处で死んでもらうしか……………」

「くっ……………」

「恭輔さん!!」

そして妖夢はやむ終えなく恭輔にトドメを刺そうとする……………

西行妖の近くに2人の人影がある……………西行寺幽々子と見覚えのある黒装束だ……………

「本当にこれで良いのかしら?」

「ああ……………これで貴女の目的は達成されるでしょう……………」
黒装束は不気味な笑みを浮かべる……………幽々子はそれに悪寒を感じていた……………」

「では、私は少々席を外させて貰いましょう……………」

そして黒装束は幽々子から遠くに離れる……………」

「信用しても良いのかしら……………怪しいわね……………」

そして幽々子から離れた黒装束は……………」

地面に黒い魔法陣を出し黒い亡霊を2体召喚する……………」

「フッフ……………お前達……………そろそろ頃合いだ……………奴らをあの小娘ごと殺せ……………良いな……………」

『『カシコマリマシタ』』

「黒竜の卵もあの妖力で簡単に孵化するだろう……………それまでに奴らを殺すのだ……………」

そして黒い亡霊はその場から消える……………」

「後は……………時を待てば……………クククク……………」

その頃の妖夢達……………

「さようなら……………」

「そんな簡単に……………死んでたまるか！」

蹴りで妖夢の刀を弾き新たに地面から大剣を抜く……………

「中々諦めないんですね……………良いでしょう……………私の最高のスペルで終わらせましょう……………人鬼『未来永劫斬』……………」

妖夢は急激に突入速度を上げ恭輔に一閃する……………そして数えきれない程の斬撃を瞬く間に浴びせる……………

「ぐ……………っ！し……………死ぬ……………」

そして恭輔の体は血に染まり真っ赤だ……………そして最後の刀の振り下ろしが肩から縦に深く刀が体に喰い込み、引き裂いた……………

ブシャアアアアツ！

そしてその傷口から大量の血が吹き出し地面も鮮血で染まって行く……………

「殺生はしたくありませんが……………仕方なかったのです……………といつても意識はもうありませんよね」

そして妖夢は刀を鞘にしまう……………

幻想郷某所……………

風也は動かずじっとしていた……………その時、あるものを感じ取る

……………

「この力……………あいつが一度死にかけたという事か……………あの力はあいつには過ぎた物だ……………奥底の力が使えるが……………身体が保つか……………仕方ない……………行くか……………」

風也は転移魔法を詠唱し幻想郷と冥界の栄え目まで移動していった……………風也のトラウマの場所へ……………

冥界……………

恭輔の全身に土が包み巨体のゴーレムと化す……………外見に透き通る様な鉱石……………さしあたりダイヤゴーレムと言つべきか……………

【ハアアアアア……………】

ダイヤゴーレムは妖夢を手で潰そうと手を叩きつける……………

「ぐっ……………この力は……………」

妖夢は白楼剣で何とか手を受け止める……………だが力押しされていく

……………

「このままでは……………ハッ！」

刀で手の軌道を逸らし横にずらす……

「これでっ!」

ギャリリッ!

妖夢は白楼剣でゴーレムの胴を斬るも……傷一つ付かない……
むしろ白楼剣の刃が欠けたのだ……

「嘘……この硬さ……一体……ぐあっ!」

そしてゴーレムの拳を直に受け吹き飛ばす妖夢……

「ぐっ……骨が折れた……一撃で……」

妖夢の肋骨、右腕の骨が折れたのだ……刀は片手でしか支えられ
なくなった……

その時……

『魂魄妖夢……霧生恭輔……』

『貴様ラノ命……寄越セ……』

黒装束が召喚した亡霊が2人の視界内に現れる。

「幽々子様の亡霊じゃ……ない?」

【……………】

『西行寺幽々子二八、適当ニ報告スレバ良イノダヨ……………』

『ダカラ貴様ヲヲ処分スル……………』

「なっ!？」

その瞬間……………亡霊2人の手には悪寒がする武器が手にある……………片方は大剣、片方は双剣……………そしてそのオーラで鎧を身に纏った……………異常な程の量の闘気を出し……………

『我が名は魔剣ザリチエ……………殺戮の大剣……………』

『我は魔剣アカマナフ……………貴様らの血を貰い受ける……………』

そしてザリチエとアカマナフは2人に斬りかかって行った……………

第16話 力の暴走、第三の敵（後書き）

リネージュ？の魔剣を名前を流用してます）、、（

第17話 参戦……………

ザリチエとアカマナフは一方的に妖夢と恭輔を押ししていた……………

「このままでは……………殺される……………」

【……………】

剣を地面に刺し支えて立っている妖夢の腹部からは血が滲み服を紅く染めている……………

ゴーレムもとい恭輔は肩から腕が削ぎ落とされ両腕が無かった……………
…ゴーレムは妖夢を襲わずザリチエ達に敵意が向いていた……………理性が戻る傾向にあった……………

『さあ……………終わりにしようか……………』

『貴様らの命の終焉を……………』

ザリチエとアカマナフは完全に疲弊した2人に歩み寄る……………その近づく一歩一歩が2人の命の終わりを近づけていく……………

そしてザリチエとアカマナフは武器を振り上げ狙う……………そして振り下ろす時……………

……………ちょっと待ちな……………

4人の聴覚はその声を聞きとる……………その後……………

その頃のルーミア達……………

「はぁ……………はぁ……………」

「だ、大分数が減りましたね……………」

文とルーミアも長い戦いで体力が尽きる寸前だ……………文の刀の先は折れ、ルーミアの黒い大剣にもヒビが入り今にも壊れそうであった……………

2人の周りにはまだ千数百は敵が囲む……………全滅させる前に2人の体力が尽きるのが先である……………

「私達は足止めが出来た……………それだけで十分……………」

「ルーミアちゃん、死ぬのは駄目ですよ。どっちも生きて帰らなくては」

「そうか……………けども、恭輔達は大丈夫なのだろうか……………」

「分かりませんが、きっと生きてますよ。私達も此処で生きないと文とルーミアは自分の壊れかけの武器を構え、残った敵達に突っ込んで行った……………」

その頃の風冒は……………

「チッ！」

ガキキキキッ！

3体の亡霊の鎌を2本の古刀で全てを防ぎ続ける……………最初は4体居たが1体は消滅させられていたのだ。

「さっさと終わらすか……………風符『序の風』」

その瞬間、3体を暴風で怯ませ持っていた古刀を投げつけ亡霊を2体消滅させる……………

風昌の体には風が纏われていた。投げた古刀にも風を帯び斬れ味が増していたのだ。

「このスペルは体の負担がでかいんだ……………消してやる……………」

風昌は鉤爪を構え突っ込み、残った亡霊は鎌を回転させ待ち構えていた……………そして……………

ザンツ……………ポトツ……………

風昌の鉤爪は亡霊の鎌ごと、首を飛ばしていた……………そして亡霊は完全に消滅する……………

「ぐっ……………ぶはぁ……………はぁ……………はぁ……………辛いな……………」

風昌は一息つき、地面に仰向けに倒れる……………

「皆大丈夫かな……………」

そしてすぐに起き、体から痛みが走るが恭輔達が向かった方向に歩き始める……………

恭輔達は……………

振り下ろされる2本の魔剣、その前に出て防いだのは……………もう1本の魔剣を持つ鎧だった……………

『全く……………此処には来たく無かったが、お前らが関わっていると、悠長に居られないな……………』

その姿は……………大型の鎧の正体は風也だった……………ずっと前の異変の時、力に飲み込まれた時の姿た……………

『貴様も魔剣か……………名は？』

『魔剣「バルムンク」……………』

『貴様も呪われた魔剣を持つか！我々と同じだなっ！』

『黙れ……………貴様らと同じにするな……………』

風也が大剣に込める力が強くなり始める……………

『貴様のその身、その剣は血塗られた歴史を辿ったというのか！』
『？』

『黙れ…………俺は…………貴様らとは違うつ……!』

その大声と共にザリチェとアカマナフは吹き飛び数m後ろに着地する…………

『ククク、違うつというのなら我らに勝つ事だ…………』

『魔剣にも強さはある…………貴様の魔剣は最弱クラスの魔剣だがな…………』

『上等だ…………妖夢、そいつを任せる…………この石でそいつから妖力を吸い取れ!』

妖夢に透明な石を投げる…………妖夢はそれを受け取る…………

「あなたは一体……………」

『説明は後だ…………まずはこいつ等を消さなきゃならん…………』

風也が参戦し、戦いは再開される…………そして同時に風也はこの異変の黒幕に気づいたのだ…………

第18話 魔装、裏切り

『遅いな……………』

『その様な実力で我等に敵うとも思っただか!』

ザリチエとアカマナフは同時に連携攻撃を重ね、風也に反撃の隙を与えない……………

『ぐっ……………やはり魔剣は使わない方が良いのか……………』

風也の動きは鈍く、両者の攻撃を防ぐのは精一杯だ。

剣撃が鎧を掠める……………徐々に押されていく戦況……………激しさを増す両者の攻撃……………一瞬の緩みも無い……………

『貴様の敗因は我らが相手だった事だ!』

そしてザリチエの大剣が風也の大剣に深くめり込む……………そして……………

バキイイイン……………ガシヤッ……………

風也の魔剣の刃が完全に斬り落とされた……………そして風也の鎧化が解かれる……………

「ちっ……………やっぱり魔剣じゃ無理って訳か……………此処まで力を出さなきゃならんのか……………」

すると風也の真後ろに異次元の穴が開く……………そしてその穴に折れた魔剣を放り込むと穴が消えた……………

『なんだ……………投降する気か？』

『貧弱だな……………』

「いや……………勝利宣言をさせて貰う……………」

風也はその一言を言うと一気に周りの空気が震える……………

『な、なんだ……………』

『こ、この闘気の量は……………』

風也達の周りの砂利や小石が浮き始める……………

「俺の実力の60%を出してやるんだ…………… 光栄に思え…………… 『魔装』

」

その直後ドス黒い闘気が風也を包み、鉄色の鎧があらわれる……………

【さて…………… 逆転劇の…………… 始まりだ……………】

風也の手に闘気で手斧が生成される……………そしてその斧を投げる……………

ガギッ……………

ザリチエは魔剣で斧を弾く……………だが魔剣の刃に亀裂が入っていた

……………

『防いだけでこの威力だと!?!』

【これが俺の能力さ……………】

風也はアカマナフの双剣を生成した槍で受け止める……………

『なっ……………我々が……………押されてる……………だど?』

双剣を押し付けるアカマナフの方が槍を片手で持つ風也より有利な
筈が全く動かない……………

【まずひとつ……………】

風也は槍を持つ手首を強引に捻じりアカマナフを吹き飛ばす……………

その直後、もう片方の手で鎖で繋がれた棘のある鉄球を生成しそれ
を見えない早さで投げ付ける……………

ベキヤツ……………メキメキメキ……………

『がっ……………』

吹き飛ばされたアカマナフは地面に倒れる……………直撃した鎧部分は
砕け、そこからは血が流出していた……………防いだ筈の双剣も粉々に砕
けて居た……………

『アカマナフが……………一撃……………』

ザリチエはアカマナフが倒れている惨劇を目の当たりにする……………

【おいおい、余所見とは随分余裕だな……】

ザリチエのその隙を風也は見逃さなかった……その一瞬の間隙の間に間合いを詰めていた……

『しまった!』

そして風也はザリチエの胴体に槍を突き刺し、鉄球で大剣を砕いた

……

『が……あ……』

風也は突き刺した槍を捻じりザリチエに苦痛を与える……

『ぐ……くくく……この痛み……苦痛を我に与えるとはな……それだけは後悔しておけ……』

【……】

その言葉のすぐ後、ザリチエは塵となりその場から消滅していった……そして倒れていた筈のアカマナフも消滅していた……

【あの言葉……怪しいな……】

風也が魔装を解き妖夢達が居る場所に近寄る……

「大丈夫か？」

「はい、なんとか。この石のおかげで傷も塞がりました。」

風也と妖夢が話す中、恭輔が目を覚ます……

「う……此処は……」

「冥界だ……お前は力で意識が飛んでただけだ。」

恭輔に簡単な説明をした後、妖夢の目の前でしゃがむ。

「妖夢だったな、早くこの先に急ぐ、嫌な予感がする……」

「嫌な予感……ですか？」

「ああ……最悪な予感がな……」

西行妖の桜の目の前……

「妖夢がやられた!？」

「ええ……侵入者に殺された模様です……」

黒装束が言う言葉に幽々子は動揺していた……あの妖夢が殺されたと報告したからだ……

「私自身で止めに行けば……」

「その必要は無い……………貴様はもう用無しだ……………」

ザシュツ……………

その瞬間、黒い竜の腕が幽々子の胸を貫く……………黒装束の腕だ……………

「なっ……………！あ、貴方……………」

幽々子の口から血が込み上げる……………傷口からも大量の血が溢れる

……………

「西行妖のコントロールは私だけがやれば良い……………貴様の利用価値は消えたんだよ……………」

「まさか……………私達を……………騙して……………」

「その通り、だが気づくのが遅過ぎたな……………」

黒装束は幽々子の体から腕を引き抜き蹴りで幽々子を蹴り飛ばした

……………

重症を負った幽々子に飛ぶ力すら亡くなって居た……………そして幽々子が居なくなり主導権を握った黒装束……………

「さあ！！西行妖よ！卵にその膨大な妖力を集結させたまえ！」

そして巨大な黒い卵に西行妖の妖力が次々と送り込まれていく……………

…そして卵から聞こえる鼓動の音が大きくなっていく……………

第19話 共闘……異変の黒幕

ドシャツ……………

幽々子は西行妖の根っこ部分に落下し体を強打する……………傷からの血が止まらない……………地面を紅く染める……………

「は、『反魂蝶』……………」

幽々子は最後の力を振り絞り一匹の蝶を出す……………

「よ……………妖夢まで……………届け……………ば……………」

蝶を飛ばし、そして力無く幽々子は気を失った……………このままではこの世から消滅するのは時間の問題だ……………

一匹の蝶が輝き宙を舞い、妖夢の元へ羽ばたいていく……………

その頃のルーミア達は……………

「はぁ……………はぁ……………やっと全滅しましたね……………」

「もう体力の限界だ……………」

ルーミアと文の周りには数千の死霊や亡霊、アンデットが倒れて居た……………2人の体も限界が来た様でその場に座る……………

「武器もこんなにボロボロですよ……」

文は持っていた刀を良く見ると刃が9割欠け、ヒビが入り、途中で折れていた……

「これでは雑魚1匹でも勝てる気がしないな……」

地面に捨てられているルーミアの大剣ですらボロボロになって使い物にならない状態だった。

「後は恭輔さん達に任せるしか無いですね」

風也達……

風也は推測でわかっている事を全て恭輔と妖夢に教える……

椀は後から来た風昌に保護して貰った。

「ああ……恐らく黒装束がこの異変の黒幕だろう、奴らを差し向けたのも黒装束だ……」

「では……幽々子様は……」

「あいつらの策に踊らされてたって事だ。用が済めば処分する筈だ……」

「そんな非道な……」

「恭輔だったか……あいつらに情なんて存在しない……破壊、殺戮、終焉の事しか考えない集団だ。油断はするな……」

すると目の前から飛ぶ風也達を襲って来たのは黒い子竜だった……

「ちっ！恭輔と妖夢は陸から行け！竜の相手は俺がやる！」

風也は飛べない恭輔の手を離す……妖夢は高度を下げ着地し、恭輔は高度からの落下を無理矢理着地した……

ズドンッ！スタッ……

「陸から行けって言っても、陸にも黒い奴が居るじゃねえか……」

陸に降りた妖夢と恭輔の前に立ちはだかるのは黒いリザードだった

……

「鉾符『サファイアエッジ』！」

恭輔は巨大な大剣を地面から引き抜き一振りでブラックリザードをなぎ倒す……

「『現世斬』」

妖夢も刃の欠けた楼観剣で同じくブラックリザードを斬り捨てる……

……そして2人は着々と歩を進めていく……

ゴオオオオオ……

風也は360°の方角からプレスを食らい続ける……

『面倒な奴等だ……力を借りるぜ……咲夜……起想「十六夜咲夜」』

【ギヤアアツ！】

その瞬間、複数のドラゴンの頭にナイフが突き刺さり墜落する……

ドラゴン達が風也を見ると体の周りに数百のナイフが浮いている……

……

『まさに動局的を当てる感じが……』

そして一振りで数十本のナイフを投げ次々と頭に突き刺していく……

……

仲間が殺される事に激怒しドラゴン達は怒りに狂って突っ込んでくる……

『ナイフが尽きる……次だ……起想「靈鳥路空」』

風也の周りからナイフが消滅し、腕に制御棒、背中に羽が生える……

……

『数が居ても、この技には無意味なんだよ！記蘇「キガフレア」』

構える制御棒から莫大な熱エネルギーが収束する……そしてそれは一気に前方へと放たれる……

ジュウウウウウウ……

射線上に居たドラゴンはその核の火に飲み込まれ、瞬く間に蒸発する……………

その頃の地上……………

「あづづづづっ！！？」

恭輔達の所まで熱気が届きブラックリザードは全体蒸発し始めた……

「嘘だろ……………あんな離れててここまで被害が……………」

風也是上空600m以上で戦ってる筈が地上までその攻撃が届いて居た……………

「敵にはしたくないですね……………ん？……………あれは……………」

妖夢が見つけたのは一匹の蝶……………その蝶は妖夢に見つけられるとパタパタとある方向へと行く……………

「幽々子様の反魂蝶！？待って！」

妖夢は蝶を追いかけて走り出す……………そして恭輔もそれを追う……………蝶が案内する場所へ着き、2人が見たのは……………

血だらけの幽々子の姿だった……………

「幽々子様！？しっかりと下さい！！」

「血が止まらないぞ……………妖夢！その石を使い！」

「あ、はいっ！！」

妖夢は風也に貰った治癒魔法の石を幽々子の体に当てる……………だが傷が塞がらない……………血も止まらない……………

「傷が……………消えない……………何で……………」

すると風也が着地し幽々子の容体を見る……………

『まずいぞ……………これは呪いだ……………生者に与える呪いよりタチの悪い死者へ使う呪い……………あいつらならこんな呪いは容易いか……………』

「死者の呪い……………？治さなかったら……………消えるって事ですか……………？」

『ああ、これはまずい、早く奴らを消さないと……………』

すると……………

「良く来たな……………」 『呪われた者』よ……………」

風也達の真後ろに黒装束が現れる……………

『やっぱり貴様らか……………この呪いの元凶は……………』

「その通り、その傷を負わせたのも私だ……………」

「許さない…………許さない…………」

妖夢は黒装束に斬りかかる…………だが黒装束は腕で簡単に防いでいた

…………

「よくも私たちを騙したな！！貴方は此处で私が殺す！」

「そんな事が出来れば良いのだがな…………蘇れ…………黒水晶の竜よ……………」

黒装束と妖夢の間に巨大な竜の頭が地面から出現する…………頭は次々と出現し6つの頭が見える…………

「呪いを解きたくば、私を殺してみろ！！」

黒装束は龍の頭の1つに乗っていた…………6つの頭を持つ龍が3人の前に立ちはだかる…………

「時間は残されてないのにこれかよ……………」

『やるしかないだろう……………』

「ええ…………こいつは許せません……………」

そして黒幕の黒装束との戦いが今始まるのだ…………

第20話 力の復元

そして、黒竜との戦いが始まり、風也達は押されていた……

「くっ………各個が周りのカバーしながら戦うなんて………っっ！」

「厄介過ぎるぜ………ぐあっ！」

黒竜の頭の突進により妖夢と恭輔は地面に強打させられる……

「ぐ………骨が数本逝ったか………大丈夫か？妖夢さん………」

「な、なんとか………」

「二人とも！離れる……！」

恭輔と妖夢が立ち上がる時、風也からの掛け声が出る……

「凍りな………起想「チルノ」………」

それを唱えた後………お空の能力とは逆の冷気が風也の体を包む………

「氷精の本質を教えてやるよ………」

そこには青い髪………そしてチルノと同じ6枚の氷の羽を持つ風也の姿が現れる………

『記蘇「ソードフリーザー」』

凍える様な凍気が風也の右手に収束し形作って行く……

「あれは………チルノのスペル………なのか………」

恭輔は一度、風昌とチルノの戦いを見ていた………そして風也はチルノのスペルと同一の物………いやそれ以上のスペルを出していた………すると風也の右手には氷で出来た両刃の剣が握られていた………

『凍える………』

ヒユウウウウウ………パキパキパキッ………バリンッ！！

風也が剣を振るうとその冷気で6つの内1つの頭が瞬間で凍り砕けた………

「なっ！？1頭やられただど！？」

だが1頭を倒された事により5頭の攻撃は勢いを増した………

5頭同時にブレスを吐いてきたのだ………

『恐れてるんだな………この状態で火は喰らいたく無いな………起
想「霧雨魔理沙」………』

そして弱点を保護するかの様に次の能力を呼んだ………魔理沙の能力だ………

風也を星が包み数秒後にその星達が弾け飛んだ………魔理沙と似た格好をした風也が現れる………

『魔理沙のは地味にテンションが上がるから少し控えたいが……
仕方ないな』

風也は空中で水晶を取り出し構えた……すると水晶の中心にエネ
ルギーが集まって行く……

『妖夢！恭輔！追い打ちは任せる！記蘇『マスタースパーク』！！』
構えた水晶から魔理沙のスペル同様のビームが照射され龍の胴体に
直撃する……そして胴体にあった黒水晶にヒビが入る……

「妖夢！行くぞ！」

「はいつ！」

恭輔と妖夢は同時にそのヒビの入った黒水晶を思いつきり斬り裂い
た……

ガシャーンッ！

「貴様らっ……」

「その首……貫きます……」

瞬間的に黒装束の後ろに妖夢が刀を構えていた……そして黒装束
の首を一瞬で跳ねた……

頭は地面に落ち、統率力を失った竜は取り乱し始めた……

「焦ってる……操る者が居なくなっただからか」

『安らかに眠らせてやるよ……起想「西行寺幽々子」……』

風也の頭に烏帽子が付き竜の生命力を奪い始めた……

『もう無理はしなくて良い……苦しまず逝け……』

そして生命力を吸い尽くされた竜は……静かに目を閉じて死んだ……
……竜の死体は次第に消えて行き……無に帰った……

『これで終わったな……』

「幽々子様!!」

妖夢は幽々子に駆け寄る……傷が塞がり意識を取り戻した……

「妖夢……どうしたの?そんなに泣いて……」

「幽々子様……幽々……子様……うううう……」

妖夢は幽々子に抱きついて泣きべそをかいていた……あんなに戦っていたがまだ子供だ……

「異変なんて起こすものじゃ無いわね……」

幽々子はそう呟いた……

「とりあえず俺は帰ります……風冒も待っているし……」

「そうか……道中死ぬなよ……」

「分かってますよ」

そして恭輔は来た方向に歩いて行った……途中風昌、椀、ルーミア、文と合流し無事妖怪の山に行く事にした。

風也はまた姿を消し……幻想郷の何処かへ消えた……

そして恭輔達は、文と椀が住む家で過ごす事となる……そして新たな異変も舞い降りて来る事になった……

舞台は……ある場所へと……

第21話 裏切り者の脱走（前書き）

遂に黒装束から裏切りが発生します。そして幻想郷に助けを求めて来ます。さて、どうなることやら

第21話 裏切り者の脱走

某所……………

黒装束の2人が言い合いをしていた……………

「おい！稟！一緒に逃げるんじゃないのかよ！」

黒装束はもう1人の黒装束の肩を掴む

「だって2人で逃げたらバレちゃうでしょ？私が残れば遼お兄ちゃんは助けを呼べる……………」

「だけだよ……………兄として妹を見捨てるわけには……………」

すると稟と呼ばれる黒装束は遼という黒装束を突き放す……………

「早く行って！もう気づかれてるかもしれないんだよ！」

「ぐっ……………分かった、絶対助けに来る……………だから……………待ってる……………」

そして遼はその場から消えた……………

「これで良いの……………これで……………」

そして稟はその場に立ったままであった……………

幻想郷 - 妖怪の山

あれから数週間……………平和に妖怪の山の文達の家に住む恭輔達だった……………

ズルズル……………

恭輔、風昌、文、椛、ルーミアの5人でゆっくりお茶を飲みながら過ごしていた……………

「いやー、平和ってこれ程良い物とはね……………」

「本当にそうですね、数週間前の異変が嘘みたいですよ」

「では風昌さん、いつもの様に組手でもやりましょう、風使い同士として腕の高みを目指せるので」

「ええ、じゃあ表に行きましょう……………」

そして文と風昌は特訓の為に部屋を離れた……………

「じゃあ椛、俺達も剣の稽古と行くっぜ。ルーミアはのんびりしてな」

「ですね、行きましょう」

「わかったのだー」

そして椛と恭輔も部屋を離れ山の何時も稽古に使う場所に向かった

……ルーミアは床でゴロゴロして眠り始めた……

その頃の文達は……2人の周りには強風が吹いていた……

「くっ……流石烏天狗……強い……」

風昌は刀を連続で振り風の斬撃を多数文に飛ばす。

「鎌鼬も厄介ですね……斬撃が相殺し辛い……」

「行くぜ射命丸さん……風符『序の風』」

そして風昌から強力な暴風が文を飲み込む……だがその暴風は避けられていた……

「危なかった……なるほど……発動時の瞬間的攻撃、その後の肉体強化スペルという訳ですか……序というとまだ段階が2個ありそうですね……」

文はそのスペルを見た瞬間に性能を判断していたのだ……

『凄い洞察力だな、けどまだこれ以上のスペルは覚えてないんだ』

「スピードなら負けませんか？」

「俺もだ……」

そして文が超スピードで動き始め、風昌も追う様に超スピードで追い始めた……

その頃の椛達……

「ハッ！」

「そおい！」

椛と恭輔は稽古のつもりが凶暴な妖怪と出くわした為に討伐をして
いた……。だが2人は苦戦せず倒した……

「さて、これで稽古が出来るな」

「そうですね、じゃあやりましょうか」

椛は白狼剣を構え恭輔は地面から大剣を出し構えた……。そして同
時に駆け寄り【実践型の稽古】が始まった……

142

上空……

バサバサバサッ……

「邪魔をするなあぁー！」

遼と呼ばれる黒装束が上空で落ちながら闘っていたのだ……

追うのは黒装束……普通は味方同士の筈だった……遼は組織から
違反、脱走したのだ……

「俺はこんな所で死ぬわけには……………」

遼の腰、肩、腕、背中から機械の砲身が出現する……………それは他の黒装束に向け構えた……………背中の機械は外れて浮いて黒装束を狙う

……………

「出てこなければ死なずに済んだのに……………ロックオン……………目標補足……………発射！」

キユイイイン……………ドオオンツ！

すると全砲身の先からマスタースパークとは違う高熱エネルギーが射出され他の黒装束を貫いて消し炭にする……………

「これで俺の裏切りは知れた……………戻っても裏切り者として処分されるだけ……………地上に降りなければ……………」

そして遼は地上へと落ちて行った……………

その頃の地上……………

「文さんはやっぱり強いですね……………負けました……………」

「も、椛つええええ……………」

「そんな事ないですよ……………」

風昌と恭輔は文と椛に惨敗を喫していた……………そして家に戻る道

中の時だった……………

ドゴオオオオンッ！！

家の近くに何かが落ちる轟音……………4人は駆け寄ると……………黒装束が居たのだ……………

「お前はっ！！」

「復讐に来たって訳か……………」

4人は戦闘体制に入る……………

「待てっ！！戦闘の意思は無いっ！武器を下ろしてくれ！」

黒装束は起き上がり降伏の意の手を上げた……………

「いつもの奴らとは……………違う？」

「貴方らに助けを求めに来たんだ……………頼む……………信じてくれ……………」

恭輔は考え始めた……………だが風昌は

「そんな言葉を信じれるとでも？お前らの仲間にどんな危険な目に合わされたか……………」

それを恭輔が止めた……………

「待て風昌、話を聞いてみよう……………」

「ありがとう……………」

「話してくれ、どんな経緯で来たのかを」

そして黒装束は話し始めた……………

「俺の名は遼、奴らの組織から脱走して来たんだ……………奴らのやり方に嫌気が差してな……………」

遼はフードを外して喋る……………

「俺は……………いや俺達は月での異変に加担させられる為に居たんだ……………」

「お前……………達？」

「月に妹が居る……………妹も俺と同じく組織の人間だ……………だけど俺を逃がす為に手伝ってくれたんだ」

恭輔達は黙って話を聞いて行く……………

「もう少しで月に異変が起こる……………だから助けに行きたいんだ」

恭輔と風昌は考え込む……………

「あなた1人じゃ無理だったのか？」

「無理だ、俺以上の奴らが15人集められて……………」

「最良に妹を助けて共に脱走する事……………最悪の場合……………妹と共に……………」

に死ぬ……………」

遼のその言葉は重みが物凄いものだった……………それは本心だからこその言葉の重みだった……………」

「本気なのか……………」

「本気だ……………頼む……………」

遼は頭を下げる……………すると文が前に出た。

「そうでしたら手伝いましょう、良いですよ？恭輔さん」

「ああ、あいつらを潰せるのなら利害が一致する……………」

そして恭輔、文、椛は賛同し、風昌は考えこんでから賛同した。

「すまない……………恩に着る……………」

遼は恭輔と手を組み共闘する事となった……………」

「だけど最悪死ぬってそんなのは……………」

「こんな身体で生きる希望なんて無いさ……………」

バサッ

遼がマントを翻すと……………無惨に体に埋め込まれた機械……………「コードが多数身体に付いていた……………」

「うっ……………」

「嫌味にも自爆装置も付いてる……………遠隔操作での爆発は防いだである……………」

そして遼はマントを元に戻す……………そしてフードも被った……………

「そ、そうか……………」

「月に行くという事はにとりの発明に頼りましようよ」

「そうですね、あの河童の事ですし、そのくらいの発明は作ってくれそうです。」

そして椀と文がにとりという河童に話を付けてもらいロケットという物を作って貰う事となった。

燃料不足に関しては遼が何とかする……………

その数日後……………月で多数の爆発が確認された……………異変が始まった……………

「さて、行くうか」

にとり製のロケットに武装した椀、文、ルーミア、風昌、恭輔、遼……………そして成り行きで連れてかれるはたての姿もあった……………

「文、なんで私まで……………」

「新聞のネタにはなると思ったのですがねえ……」

「うっ……なるほど……」

そして全員乗り込みロケットは月へと飛び出した……

博麗神社の方でもパチュリーの手助けで霊夢、魔理沙、咲夜、レミリアの4人が乗り込んだロケットも発射されていた……どちらも目的は月の解決だった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3948y/>

東方幻風録

2012年1月13日02時49分発行